



flowline flower by HentaiGirls



野沢菜

ジェンガ2003

早川一

日溜。

みみずの紐

片桐天音

flowline flower

野沢菜

ジエンガ 2003

早川一

日溜。

みみずの紐

片桐天音

もくじ

土手の魚

送肉

イカロス

私の知らないところで幸せになつて。だつて貴方に不幸でいてほしい。

ねぐら

甘い煙に誘われて

甘い煙に誘われて 2

表紙デザイン — 野沢菜／片桐天音

土手の魚

野沢菜 (@burasica)

「我々の根気強い話し合いが身を結び、市民団体様にもご理解頂けまして、そのおかげもありまして、この地にも、我々の総合施設を建てる運びとなつたわけでありましても……」

二束三文にもならない土地へ執着する老人たちと、私利私欲を蓄えることしか考えていない私企業の縄張り争いについて、うだつの上がらないさうなサラリーマンがダラダラと話している。

大学の金で旅行に行き、ついでに老人の戯言について感想文を提出するだけで単位が取れる、そう聞いて取つた

講義の旅行先が、まさか私の故郷だとは思いもしなかつた。去年の旅行先は温泉地だったらしいのに、今年から変更になつたらしい。

同期がサークル活動やらなんやらでバラ色の学園生活を謳歌しているときに、私は帰省して一私企業のつまらないプロパガンダを聞いている。きっと、これは真面目

に単位を取らなかつた私への罰なんだろうな。こんなことになるなら、ちゃんと単位を取つておけばよかつた。
「我々の施設は、現地住民の方の雇用も創出しておりま

して、地域への貢献も出来ているものと信じておりますので……」

いまいち要領を得ない日本語と共に、「施設内で活躍するクルーたち」というキャプションのついた写真が映し出される。写真に映し出されるのは、張り付いた笑顔で接客するクルーたちの日常だ。

普段なら良くて流し見するような退屈な写真たち。その一つに、私は釘付けになつた。■■だ。生氣が耳から抜けきつたような顔に騙されそうになつたけれど、間違いない。

あの日、あの土手で別れてから、連絡が取れなかつた。どこに行つたのか、なにをしているのか。その手掛かりすら、どうあがいても掴めなかつた。もう、忘れようと思つていたのに、まさかこんな場所で出会えるなんて。

「写真を撮つてくださるほど、熱心に聞いてください、嬉しいかぎりでございまして……」

そんな社交辞令を言う余裕があるなら、早く話を終わらせてしまい。私の願いもかなわず、講義が終わつたのは、終了予定を一時間ほど過ぎた頃だつた。

＊

なけなしの生氣をこめたその声は、私の心に、いやに響いた。

螢の光を聞きながら、写真を頼りに■■を探す。「地域最大級」と横断幕を掲げているだけあり、とても広い。そ

のくせ、同じような風景だけが続く。複雑に入り組んでいるわけではないのに、何があるのか、私がどこにいるのかすら分からなくなってしまう。綺麗な迷宮、そんな言葉が似あうこの施設を、いくらさまよっても、■■は見つからない。

この施設は、地獄を現世に再現しようとしたものなのだろうか、そんなことすら考へてしまふ。

煌びやかな明かりの下で、衣服に囲まれながら光を吸い取り蠢く従業員たちの中に、■■はいた。あと数分遅ければ閉店時間で追い出されていたと思うと、見つけられたのは奇跡としか言いようがない。

どのような言葉をかけよう、向こうから声をかけてくれればな、なんて悩んでいると、■■の方から声をかけてきた。

「すぐに上がるから、あの土手で待つてくれると嬉しいな」

＊

「あの土手」は、■■と別れたあの日と同じ姿で、私を出迎えてくれた。記憶の奥底にこびり付いて離れないあの日の思い出が、まるで水を得た魚のように私の脳内を駆け巡る。

「ごめんね、遅くなっちゃった」

土手の水に狂喜乱舞する魚たちが過労死しそうになつたころ、■■は私の前に姿を現した。けれど、施設の中を見た■■とは違う。私の知つてゐる■■とも少し違う。「キミは変わらないね。私も、この町も変わっちゃつたから。変わらないで居てくれるのは、なんだか嬉しい」変わらないで居てくれて嬉しい、思いもしなかつた言葉だった。私はなんと返せばいいのだろう。

「昔、この土手でよくおしゃべりしたよね。夜に家をこつそり抜け出してさ。二人だけのヒミツの星座を作つたりもしたよね」

■■が見つめる先には、施設の光で白みがかつた空が広がっている。

「あの辺りに……もう見えなくなっちゃったから、名前は思い出せないけれど。楽しかった」

「なら、どうして別れようって、言つたのよ」

絶対に言わないでおこうと決めていた言葉が口からこぼれ出る。これもきっと、私への罰なのだろう。樂をしようとした私への罰なのだ。

「私を攫つて欲しい……キミがいる、もつと明るいところに、さ」

「どうして……」

「星座を失くしてしまったから。だから、攫つて……ほしい、の」

そういうえば、別れる時も強引だった。夜空も、この町も、そして■■も変わってしまったけれど、そこだけはあの頃と変わっていない。そして、私がその強引さに流されるのも、あの頃と同じだ。

もしかすると、この土手に泳ぐ魚だけは、変わらないのかもしれない。これまでも、そしてこれからも。

送肉

ジエンガ 2003 (@NTSC_J)

登場人物紹介

赤身一肉

青菜一野菜
教授一教授

私は肉でできている。毎朝目覚めるたびに、私は重力が肉を歪めるのを感じる。

ベッドから起き上がり、目脂で汚れた眼で辺りを見渡す。携帯電話に入っていた新しい通知は、パプリカ味の豚の栽培に成功したというニュースだつた。

半世紀前に疫病が地表から植物を一掃して以来、私が住む内陸では、庶民の食事のほとんどが肉類でまかなわれていた。光合成するものがいなくなつたことによる二酸化炭素濃度の上昇による悪天候と慢性的な倦怠感が、どの街をも蝕んでいた。

今朝の食事は鶏もも肉と牛乳だった。肉は消毒されているので、生のままだ。昔と違つて、肉を加熱して食べる人はいない。残り少ないエネルギーの無駄遣いだし、水溶性ビタミンの欠乏は生命に関わるからだ。

人類が野菜を食べていた時代について、老人たちが寂しそうに述懐するのを、私は幾度となく聞いてきた。でも、野菜どころか植物を見たことのない私には、それは実感のない昔話でしかなかつた。

今日は月曜日だ。大学生の私は、動物の遺伝子を組み

換えて植物の代用品にする研究をしている。このような研究は今や世界中で行われているが、私の師事する教授は日本人としては比較的名の知れた人である。

＊

休み明けのせいか、学生はまだ研究室に来ていないようだつた。読みかけの論文があつたのを思い出し、モニタの電源を入れたところで、

「赤身さん、いいところに来た。これを見て『らん』

教授が珍しく興奮した様子で、A4の羊皮紙の束を手渡してきた。たどたどしい英語で書かれており、ところどころに赤ペンでメモ書きがされている。

「これはね、昨日発表された論文です。深センの南方科技大学の研究でね、前々から、注目していたんだけど……」

「ついに、動物の肉からほうれん草を作ることに成功したらいいんだ」

「ほうれん草、ですか」

「ほうれん草は重要な葉物野菜で、かつては世界中で食べられていたんだ。私も子供の頃に一度だけ、おひたし

を食べたことがある」

「動物でほうれん草を作る研究は今までにもたくさんあってね、といつても、どれもまあ、ぱつとしなかった。にもかかわらず、この研究では食感や味まで、ほぼ、完全に再現しているらしい」

「ほー……それで、何の動物から作るんですか」

教授は表情を変え、深呼吸した。

「それなんだけど……この論文にはあえて書かれていない」

「え」

「が、著者の他の研究から察するに、どうやら……」

「あー……」

「人間らしい」

＊

教授の言うとおりだつた。件の論文は、ぱつと見ただけではよくわからないが、研究者が読めばヒトに対する遺伝子組み換えを行つてることがわかるようになつていた。

このことがニュースサイトで記事にされ、一般人の知

るところになつたのは、それから一週間後のことだつた。著者は逮捕され、供述を残している。

「私は今でも、自分のしたことを誇りに思つてゐる。ほうれん草の生産体制が整えば、世界中の食卓に、かつての彩りが蘇る」

「人間を人工的に生み出したり、その遺伝子を操作したりすることを、生まれてくる子供への虐待とか、人権侵害だとかいう人がいる。しかし、普通のやり方で親が子を持つことと何が違うのか？ 私は私の子供たちを並の親以上に愛している。その理由は苦労して生み出したからではなく、私の子供だからに他ならない」

実際、その子供たちは、体の表面がほうれん草である以外は、通常の人間と変わりがなかつた。ほうれん草は毎日、羊の毛のように収穫することができた。

＊

青菜も大学院生だつた。引越しが遅れたとかで、五月になつてからやつと研究室にやつてきたのだ。わざわざ遠方からうちの大学まで来るだけあつてい、他の学生よりも研究熱心で、教授ともすぐに打ち解けたようだつた。私は比較的研究室に長居するタイプなので、青菜と他愛のない世間話をする機会は多かつた。それでも、秘密を打ち明けられるほどの信頼を得てゐるつもりはなかつたのだ。

「一緒にトイレ行かない？ ……赤身さんには、話しておきたいと思つてたから」

「ん？ ああ、トイレね、行く行く」

不思議な誘いだつたが、机から動きたくない一心で尿意を我慢しながらモニタをぼーっと眺めていた私は、すくと立ち上がり、言われるがままについていった。

「私、実はサイボーグなんだ」

「へ？」

「見て」

青菜はおもむろにシャツをまくり上げ、腹部を見せた。

それから二年がたち、私は大学院生になつてゐた。ほうれん草のことなど、もうすっかり忘れていたのだ。

青菜が入つてくるまでは。

*

臍のあたりから、濃い緑色の葉が何本か上に伸びていた。

「青菜さん、これって」

「ほうれん草。……前、中国に留学しに行ってた時、幹細胞を少し分けてもらつたんだ」

私は一瞬、言葉を失つた。青菜の覚悟と行動力に驚いたからではない。初めて生で見た野菜が、炭酸ガスに停滞させていた私の脳髄に、鮮烈な印象を残したからだつた。美しい、という言葉が適當かどうかはわからな

い。しかし、他の言葉が見当たらなかつた。

「……なんか、いいね」

「でしょ。これ、食べられるんだよ。お肉と一緒に塩振つてチンすると美味しいの」

「へえ……」

さつきまで神秘だったものが、急に日常に引き下ろされて、私は少し混乱した。美味しい、というけれど、どんな味か私には見当もつかない。

「そうだ。赤身さんも食べてみる？」

たつた今思いついたようなことを言う割には、はじめからそう言うつもりだつたみたいだ。固まつた意志を感じ

じさせる言い方だつた。

「えつ、えーと……いいの？」

安全性とか、確認したいことは他にもないではなかつたが、別に青菜を疑う理由もなかつた。ちょっととした秘密を共有したのだ。私が食べれば、私も青菜だけが知る秘密を持つことになる。青菜は秘密の均衡を保ちたいのだろう。

「もちろん。嫌だつたら無理にとは言わないけど」

「嫌じやないよ、むしろ興味があるっていうか……えーと……じゃあ、あの、お願ひします」

「ふふ、じゃあ、今日は常夜鍋をご馳走しましよう」

*

青菜の住む家は、私のアパートとそう変わらない、1Kの单身向けの一室だつた。

しかし、私の家と決定的に違う点が一つあつた。青菜の家には、電磁調理器と小さな雪平鍋があつた。

一人暮らしで加熱調理を行う人は珍しい。それも、普通の人が持つてているのは電子レンジくらいだ。鍋を見た

のは母の実家以来だった。

青菜は慣れた様子でほうれん草を根本からちぎり取り、水道の水でさっと洗った。鍋に昆布と豚バラ肉、そしてほうれん草を放り込み、水を加えて塩を振った。

「常夜鍋ってね、毎晩食べても飽きないから、常夜鍋つていうんだって。本当はお酒を使うらしいけど……」

米を発酵させてつくる酒は、それはそれは美味しいものだつたと、祖父もよく言つていたものだ。

電磁調理器の電源を入れた。ジーとやかましい音がする。

「ありがとうね、今日、来てくれて」

「いやいや。こちらこそ、どうも」

「ずっと誰かに言いたかったんだけど、信頼できる人がなかなかいなくてさ」

「……そんなに信頼して大丈夫なの、私のこと……」

「うん……いや、信頼っていうか、純粹に赤身さんと仲良くなりたかったっていうか」

青菜の行動のリスクから判断するに、社交辞令ではないようだった。これはずいぶんと好意を持たれているのではないか。

「たはは……それはありがたい」

そうこうしているうちに、鍋が沸騰した。

「じゃあ、いただきましょうか」

青菜は皿に薄めた氷酢酸を注いだ。

具を箸でつまみ、酢酸に浸してから口に運ぶ。私も青菜に倣つた。

一口目に感じたのは、初めて経験する風味だった。酸味と肉の旨味が、後から追つてくる。

「これ、おいしいね」

「でしょ。よかったです、自分以外にもおいしいと思つてもらえて」

「うん、本当においしい。……また頂きに来てもいい?」

青菜はとても嬉しそうな顔をして、

「もちろん! 毎日でも来て!」

外へ出ると、もうすっかり夜だった。今まで退屈だった夜空が、今夜は少しコントラストを増していた。

それから、数日に一回青菜の家で夕食をとるようになつた。古い資料にある様々なレシピを試した。

調理をし、食べることは、こんなに楽しかったのか。人

と会話をしながら食事をするなんてことを、私は今まで全くしていなかつたのだ。

幸せな日々だつた。しかし、それはほんの束の間のようこびでしかなかつたのだ。

*

発作は突然だつた。いや、厳密に言えば、兆候はあつたのだ。

八月の日差しは昨年よりさらに強烈になつてゐた。朝だといふのにうだるような暑さの中、私は青菜の姿を見つけた。

「おーい」

「あ、赤身……」

「ちよつとちよつと、大丈夫?」

「大丈夫、だけど……ちよつと水、もらえる?」

私は鞄の中の水筒を手渡した。

「はあ、喉が渴く……」

返つてきた水筒は空っぽになつてゐた。

「とにかく早く大学に行つて涼もう」

「うん……」

大学にはなんとかたどり着くことができた。青菜のほうを見ると、不思議なことに汗を一滴もかいていない。

「青菜、病院に行つたほうがいい。連れていこうか」

「ううん、大丈夫。それより早く実験をして、データを集めなくちゃ」

青菜が行つてゐる研究について、私はよく理解していくなかつた。

*

次の日、青菜は昼過ぎになつても研究室に来ないばかりか、電話をしても応答がなかつた。心配して家に行くと、玄関は開きっぱなしになつてゐた。

中に入ると、そこに青菜の姿はなかつた。

見慣れた緑色の葉が、ベッドを覆い尽くしていた。

私は親友の死をうまく認識できなかつた。

緑色の布団の上に横たわると、去年までずっと好きになれなかつた、蒸し暑い夏の匂いがした。

イカロス

早川一 (@vaginaeye)

【まんてんの虚無】

あの娘ひとりで泣いているまんてんの虚無降り注ぐ音

【切れはし】

いろんなことを口にするのをためらうようになってしまった
こんなおとなになりたかったわけじゃないのに

『ようじょの手記』より

【from me 2 u】

luv

【ススめ】

もう手に入らないのだと諦めることが必要なのです。悲しむいを恐れる」とはない。悲しむいとは前へと進むために必要な一つの手順にすぎないのだから。

【海山】

これは個人的な感覚である。

海に行くと、そこでは私は独りつきりで放り出されてしまったような寂しさを抱く。しかし、山に行くと、何ものかに深く包み込まれているような安堵に包まれる。

【世のしんり】

なにものかを手に入れることができるかのように錯覚していたから、手に入れることができないと気づいたときに（手に入れることができなかつたときに）落ち込むのかもしれないが、そもそも手に入れることなどできないのだからそんなことで落ち込むのは時間の無駄である、とアナタは言った。

【イカロス】

金平糖に手を伸ばす。掴み、手を開くと崩れた灰があるのみ。大玉を頬張れど苦く、涙の一粒。近寄ればよく見える。盲には関わりなし。

私の知らないところで
幸せになって。
だって貴方に不幸で
いてほしい。

日溜。(@hid_alma1026)

夜の空を見て「綺麗」と

呟く彼女が眩しくて、羨しくて

私はそれを、綺麗だとは思えなかつたから

遠い空の向こうの星を手にすることはできない

けれど

その星を他の全てから隠してしまおうと思つた

*

なぜ学生のうちから決算報告やら予算折衝やらをやらされているのだろう。学校が社会について学ぶための場所であるとはいえ、不平等極まりない職場環境など今体験させずともよからうに。黄昏を過ぎ、紫に染まる空を窓越しに眺めながら、庄野周はリノリウムの床を荒々しく進む。部活動に励んでいた生徒もすっかり退散している。

「—— 訊かないの？ 理由」

先程会議室を辞したときも警備員が巡回していたので鍵を閉めるのをそのままお願いしてしまった。

そのまま校門へ向かえば良かったのだが、何となく教室へと足が向いた。三日程前にチャットアプリに表示さ

だつて、見当はついているし。そんな言葉を呑み込む。この分かり易い友人は思春期真っ只中で、理解されたい

「知ってる。まだ家に帰りたくないから此処にいたの。でなければずっと帰りたくないけれど」

れ、すぐに削除されたメッセージが脳裡に浮かんだからといつて、そこに彼女がいるとは限るまいに。——本当に？ 果たして、流花は教室にいた。

「……まだ教室にいたんだ。もう最終下校時刻だよ」

し理解されたくないのだ。人のことは言えないが。

「だつて、私を待つてくれたワケじゃないんでしょ。じゃあどうでもいい」

それに——まあ、なんだ。拗ねるのは彼女の専売特許ではないのである。

*

「どうでもいい」——そう言われて、血管の耐える圧を超えていきそうなほど強く頭へ血が昇るのを感じた流花は、周へ向けて開きかけた口を、しかし噤んだ。彼女を不機嫌に、そして十数年来馴染んだ家を他人の家のように変えたやり取りを思い出したからだ。

流花の家庭は数日前急変した。それまでは何かが変わる、終わる、そんな影さえなかつたのに。

「うん、帰る」

母咲恵は、その性質を近しいもので表すのなら「気分屋」だ。「今日は天気が良いから散歩に行こう」と言う日もあれば、別の日には「今日は天気が良いから家でゲームしてようか」などと言い人を混乱させることも珍しくない。父曰く、「基準は完璧に一貫している」とのことらしいので、表にそれが出てこないだけなのかもしれないが。

そんな父と母の間柄について、流花は「母がその気になったときに父にアタックしたのだろう」と思っていた。

*

父の方から母へアタックしたと聞いて吃驚してお気に入りのお茶碗を取り落としてしまった。「そんな二人の間に生まれた自分は奇跡のような愛の結晶に違いない」と、そんなことを考えて暫く悶えていた。でも、確かに思つたのだ。思つていたのに。

＊

「咲恵さん。別れましょう」

「……何の話？」

夕食の席で、父がそう切り出したとき、流花の頭はその言葉を解釈できなかつた。母も眉を顰め、父に問う。「離婚しましょう」

父の方から母へアタックしたと聞いて吃驚してお気に入りのお茶碗を取り落としてしまつた。「そんな二人の間に生まれた自分は奇跡のような愛の結晶に違いない」と、そんなことを考えて暫く悶えていた。でも、そうでもなかつたらしい」

父は申し訳なさそうな顔でそう言つた。
「僕のできる限り努力をした。愛そうとしていたし、愛していた」

次郎太の声に温度は無かつた。熱さも、冷たしささえも感じないということがこんなに恐ろしいものだと知らなかつた。

「そう。なら仕方無いか」

母は残念そうに言つた。そこにも哀しみ憎しみの色すらない。流花の頭は今度こそ真っ白になつた。「仕方無い」？自分達の関係は、「仕方無い」で終えられてしまうようなものだったのか？ 母にとつても、そうなのか。努力つて？ 頑張らないと愛せない？ 私は頑張らないと愛せないものなの？ もう愛せないなら私は二人の愛ではないの？

その後はあまり記憶していない。そういうえば、「どちらが流花を引き取るのか」に関して、流花の前では多分話していなかつたようと思う。

父が言つていた「愛する努力」という言葉だけが、流花の中に溶けずにいつまでも残つていた。

＊

莊野周は真つ当なものが好きだ。上位に入るであろう

大学院卒の父と、専門学校卒の母を持ち、大型の休みになると孫の成長を楽しみにする両祖父母の元へ遊びに行く、勉学は国語と英語と生物が得意で数学はケアレスミスが目立つが嫌いではない。そんな環境で育つて真つ当なものが好きな人間に育つた。

では莊野周は真つ当だろうか？――否である。真つ当な人間というのは当たり前のものが当たり前に好きだから真つ当なのだ。真つ当だから好きなど、マジヨリティの志向では有り得ない。

流花との出会いは私立中学校の一年次の入学式だ。同じクラス、隣の席での入学式。実のところ、そのときは彼女のことそんなんに意識してはいなかつた。中学校に通う生徒など、皆ある程度は真つ当だつたから、木を見ることなく森を見て満足していた。

それが変わつたのは初の授業参観のとき。自分の子供を観にきた父兄の割合としては母親が多かつたが、父親の姿も無い訳でもない。周の家も来たのは父親だった。そ

の日を休むために少々無理をしたのか多少くたびれた様子だったが、その日を休むために少々無理をしたのか多少くたびれた様子だったが。

授業の始まる直前、クラスメイトの会話として、そのときには前後の席になつていた流花に互いの親はどれなのかと話しかけると、彼女が後ろに手を振り、中肉中背で穏かな目をした次郎太がそれに応えた。

――アレは何だ？ 流花の向く先を認識した瞬間、周の世界は、暫し停止した。周はごく真つ当な家庭に生まれ、真つ当な社会で生きてきた。彼女自身が周囲とどこか違うことはこの頃自覚し始めていたが、それでも周囲にあんなモノはこれまでいなかつた。

次いで流花が周の親を尋ねていたが、周は生返事しかできなかつた。

最初の授業は国語、宮沢賢治「雨ニモマケズ」。「サウイフモノ」が、いた。

とはいえ、別に異常者性愛に目覚めたというのでもない。彼女の興味はここで流花へと移つた。木偶からこんなに真つ当なものが生まれたのか、育つたのか。「代数で

「欲しい」と。

*

分からぬところがあるの」などと言つて授業後に話しかけ、元々入学式以来近くの席なのにあまり話しこむようなことの無かつた——誰とでもそうであつたが——流花と親友となるのにかかつたのは二日程だった。

新たにこの友人を流花の両親は当然歓迎した。苦手科目を教えられることで流花の成績が上がつたことや、市街をうろつくよりも家で大人しく遊ぶことの多くなつたことも理由である。

周もまた、流花と交友するうちに変化があつた。怒り、泣き、笑い、学び、少しだらけたり。真っ当でない要因が近くにいながら真っ当な流花は周にとつて常に惹きつけられる存在となつていた。当たり前のものは何もせらずとも当たり前で、自身が関わる意義も意味もない。でも、奇跡のようなこの友人は、このままでは壊れてしまうかもしれない。

周としては結構際どい部分を攻めてみたつもりだったが、不発。面白くない。やはり、家が近付いてきたことのストレスで気もそぞろのようだ。

「ふーん」

「ここでお別れだけど……家に来るの？」

「……ダメ？」

「いいけど。許可はとつてね」

「う……」

周にとつて、募らせた巨大な感情は愛や恋などと象る必要もなかつた。いつそ稚氣すら感じさせるそれが、溢れ出すほどになつたのは中学を卒業し、同じ高校に合格して暫くして。

二人で遊んでいたゲームで、モンスターの体力がギリギリになつて壇へ帰ろうとする場面を思いだした。ここだ。

「ねえ、何があつたの？」

流花の瞳が一気に涙を溜めた。そして、決壊する。

「パパは！ 愛する努力じや足りなかつたみたいだつて！」

言つてゐる内容は支離滅裂で、急に聞かされても訳が分からぬ筈だ。だから、そんな表情を作りながら、これまでにない程弱りきつた彼女の姿は——そう、そそる。

そんなことを心の裡で周は感じていた。突然の事態に傷付いて、当たり散らして。実に真つ当な反応だ。

「私は！ パパとママが愛しあつて！ それで生まれてきたんじや……なの？」

流花の叫びはその剣幕と裏腹に小さなもので。搖らい

でいるのだろう。急に父と母が他人になるなんて。二人の愛の証が自分である筈。じやあ、その愛がなくなつたら？

なんて酷い父親だろう。娘の存在理由をこんなにボロボロにしてしまうなんて。やっぱり引き離して・正解だつた。

「私が流花を愛しているから、大丈夫だよ。ずっとずつ

と、大丈夫」

*

高校生活も半ばを過ぎ。周は行動に移ることにした。アレはどうせ定刻にこの場所を通るだろう。通勤の電車で事故があつたとしても、途中で通り魔に刺されようともこの道は同じ時刻に通るのだ。悍しい。

そして、次郎太が周のいる道へさしかかった。

「あれ？ 荘野さんだよね。どうしたんだい？」

「実は、流花さんのお父さんにお話したいことがあります」

「僕に？ 流花のことかい？」

「いえ、次郎太さんのことです」

思い当たる節が無いといつた顔の次郎太を歩いて数分の公園へ促す。流花の家はずつとこの辺りにある筈なので、この公園もかつての遊び場だったのかもしれない。そう思うと胸の裡の昏い炎が勢いを増した気がした。

「それで、僕のことって？」

公園の自販機で買ったお茶を差し出しながら、次郎太が尋ねた。

「ええ。端的に言うと——貴方がいると流花さんに良くない影響が出るかもしないので、消えてください」

「……端的にというか、急にそんなことを言われてもね」「そういうところです」

次郎太が困ったような笑みで返す、

「そういうところです」

笑みが、凍つた。

「木偶の坊に、人を育てるのは無理だと思います。人間は人間と成長していくべきです」

「……娘の友人といえど、流石に怒るよ？」

「だから、そういうところです。もう怒っていなきやいけないところですよ、ここ。怒るべきと判断してから怒るなんて壊れますよ」

「どうやら君は僕をロボットか何かにしたいみたいだけど、僕にだつて感情はあるし、思わず怒ってしまうとき、だつて——」

「感情はあるんでしょうかね。包丁を持った流花を怒ったとき、怒ることのできる自分に安心したんでしょう？」

「……何を」

「ロボットなんて言つてないじゃないですか。木偶の坊つて言つたんですよ」

この数年で弱点の見当はついていた。完璧すぎる程に完璧な人間。度の過ぎた人格者。

「人間らしい」そういうとき、どんな風に連想をするだろうか。何事にも理性的で、穏やかで、欲はなく、いつも静かに笑っている？　それとも全ての物事に大いに怒り、悲しみ、愛を高らかに謳う？

馬鹿馬鹿しい。人間は人間。そのままで良からうに。人間らしくなどと考えることこそが人外への一步ではないか。

そうありたいと望みながら、自分はそんなものではないと否定する矛盾。そんなものに触れさせていたら、流花のような真っ当な娘が人間でいられないかも知れない。流花が確かに微笑むだけの木偶になる姿を想像して、思わず震えた。

さて、もう一押しかな。

*

「私がずっと愛するから大丈夫」そう言つたけれど、きっと彼女の求める愛は私の抱くものとは違うのだろう。永遠の愛が欲しいと言う彼女はしかし、止まり木を探しているだけなのだ。だが、欲しいというのなら解けなくななるくらいに、溺れるくらいに与えるだけだ。元気になれば彼女は当たり前の幸せに飛び立ってしまうから。

そして「その手を何時振り払つたら一番彼女が傷付くだろうか」そんなことを考へている。通学時に駅のホームに迫る電車と線路の隙間にふと吸い込まれそうになるようにな。

或いは——そう、或いは最期までこの気持ちを抱きながら側にいることこそが、最大の裏切りになるのかもしれない。

「顔、拭けたよ」

そうして私は、普段通りに彼女に並ぶ。

ねぐら
壙

蚯蚓の紐 (@mimizunohimono)

その日、川端泰葉カワハタタケヤを朝早くから叩き起こしたのは、嘔吐エキくほどに強烈なアンモニア臭アソニマスだつた。

アスファルトに寝転がつたままの彼女はこの匂いを嗅ぐたびに、アルコールに踊らされたであろう昨晩の自分を叱責している。だがそれは多くの状況でその場に限つた反省であり、日を跨いでその経験が生かされることはないなどない。

事実、自動販売機のみが二十四時間稼働しているこの無人酒場はあまりの立ち小便の悪臭から犬も近寄らないことで有名だったが、彼女がここで一夜を明かすのは今年に入つてから既に五回目だつた。

「寒ウ……」

今年の一月や二月頃は路上生活者を苦しめた夜の冷え込みだが、三月に入る頃には路上の水溜まりも凍らなくなってきた。まだお世辞にも温かいとは言えないが、泰葉のような飲んだくれが仮に帰宅に失敗したとしても、凍死するリスクは格段に低下したのである。

泰葉はお天道様に向けて大きく伸びをし欠伸を吐き出すと、ぼさぼさに乱れた赤髪を手櫛で整え、黒のジャン

パーに張り付いた小石を払い落とし、ポケットの中身を一通りあさつた。

現れたのは百円玉に、十円玉に、ボロボロの手帳と、スロットのコイン。そして噛み終えたガムを包んだレシート用紙。

次に口から飛び出した、

「……迎え酒でも呑まんと、二日酔いでやつてられへんわ」

という独り言には、酒飲みとしての矜持に驚嘆すら覚えさせられる。

とは言え、昨晩のどんちゃん騒ぎで吹き飛んだ彼女の懐事情を考慮すると、飲酒という娯楽からは一見すると程遠い。

だがここ西成の釜ヶ崎と言えばドヤの街・あいりん地区。消費税もどこ吹く風の極端な価格破壊が起きている事実は周知されている通りである。

泰葉は自販機に百円玉を押し込み、取り出し口から「すごいもワンカップ十二ドント」を取り出すと、息もつかせずアルミ蓋をベロリとひん剥きゴクリ、そいつを一口で呑み干してしまつた。

「ふはーっ……」

これは今年に入つてから既に三杯目の迎え酒である。

「ん？」

空きつ腹に芋焼酎が染み込みほどよい酔い心地になつたところで、泰葉は今年に入つてからまだ聞き入れたことの無い喧騒を聞きつけた。

「いや、結構です。本当に結構ですってば……」

「まま、そう言わんといて！ 自分、仕事探してまっしやろ？ 絶ッ対、楽に稼げまっせ！」

声の出処は職業安定所の方からだ。前者は若い女性、後者は水商売をあつせんする男性と言つたところだろうか。

泰葉はワンカップの空瓶をゴミ箱に投げ込み、「建物内飲酒禁止」の張り紙を横目にズカズカ乗り込んでいくと、職安の薄暗いエントランスで件の男女の姿を発見した。周囲のブーティロー達も何事かと、そちらに注目を寄せ始めている。

「おねーさんの見た目でしたら、月に百も二百も堅いんとちやいますか？」

「いや、だから別にお金には困つてませんから……」

「これ、なーんばしょつと。こんの女ゼゲン衒めが」

一見すると泰葉は、悪質な業者から絡まれる女に対し助け舟を出す善良な市民にも見える。だが彼女の判断は別に善意や良心に基づいている訳ではなく、後述するようになにこれも彼女にとつては単なるビジネスの一環に過ぎないという事実をここでは付記しておく。

「また、おぼっこい娘っ子に悪絡みしよつてからに」「あれ！ 朝もお早うから、泰葉さんやありまへんか」「わざわざ泰葉さん呼ばわりとは、えらいけつたいやのう！ 背中がムズムズするけん、ヤスでかまへんわ。で、その娘さんなんやけど……」

なるほど、確かにこの風貌ではそちらを勧めたくもない、などと失礼極まりない感想が泰葉の脳裏を過った。

白のシャツワンピースをベージュのダッフルコートで包み薄手のニット帽を被つたその格好では、娼婦パンパンを名乗るにしても、西成より梅田でふらついた方がより稼げるだろう。歳は二十五、六、栗毛の長い髪と長身がよく似合う切れ目の美人ではあるが、その自信の無さからはどこなく頼りない印象を受ける。持参するキャリーバッグ

が観光客の体を醸し出してはいるものの、本当に観光するつもりならば踏切の先ではなく今頃新世界に向けて足を運んでいるはずだ。

泰葉はわざとらしく、男に向かつて小声で囁いた。

「……実は今朝、ウチの方でポリさんから連絡もろててな」

「警察イ？」

「この子、最近お勤めを終わらしたばかりやさかい、西成の方でちやーんとキレイな日雇いを紹介したってほしいゆうてな、直接に頼まれてますねん。なんやつたら、電話して確認してみましょか？」

もちろん出まかせだ。

泰葉という女の不気味な立ち位置によつて、彼が得られるであろう僅かばかりの報酬はわざわざ危ない橋を渡るほどのリスクに見合わなくなつてしまふのだ。

「えらい邪魔しましたなあ。ヤスの姐さん、ほなまた」

無駄な労力はかけるまいと、業者の男は足早に去つていった。野次馬のフータロー達も興味を失うといつもの定位置へと戻つていき、場違いな格好の娘だけがその場に残つた。

「へえーっ！ ほんまでつか。あちゃー、えらいすんまへん。そらウチみたいな悪いもんが、商売つ氣出したらあきまへんわなー……」

あつせんする男の顔に陰りが現れたのは、紹介手数料の計算で叩いていたそろばんに横槍が入つたからであろ

う。苦笑いを浮かべ、あたかも粗相を恥じるような体を装つてはいるが、その目の奥は笑つていない。

無論この男も、どうせ泰葉のつまらないハツタリであろう、と睨んではいる。だからこそ、商売の性質上万が一があつてはまずいのだ。

「あの……さん？」

「いやー、間一髪やつたなお嬢ちゃん。せやけど、ほんまに嫌やつたら走つて叫んででも逃げなアカンよ」

「はい……」

「そーんな樂して稼ぐみたいなうまい話は普通あらへんから。あの男もタチが悪いもんやさかい、お嬢ちゃんほどの上物やつたら、明日の今頃には飛田のちよんの間で、綺麗なおべべ着て客待ちしとったんとちやいますか。へへつ」

「トビタ……チヨンノマ……?」

「ああ、ええからええから。気にせんといてな」

どうもこの辺りの土地柄に詳しくないところを見ると、着きたてほやほやの東京モ^{おのぼりさん}ンらしい、と泰葉は納得した。

「で、お嬢ちゃん。これからどないしましょ。お仕事などをお探しで?」

「ええ……はい、そうです。職業安定所と聞いて、何か仕事があるのかな、と」

「アカンアカン、もう朝九時やで? あいりんの日雇いゆうたら、お天道様が昇り始めることにはもう仕事を始めなアカンのや」

「そっ、そんなに早いんですか……」

「それにお嬢ちゃん、体格的にも土方のキツイ仕事には向いてないやろ? そら雇う側も同じ給金払うんやつたら、娘っ子よりはガタイのいいアンちゃんを雇うやろなあ。他の日雇いと同じように仕事探してたら、ええ物件が見つかる頃には日が暮れてしまいますが」

「そ、そうでしたか……」

「ついといで」

「え?」

「ええから。仕事探しとるんやろ? 朝飯でも奢つたるから、ついといで」

「は、はあ……」

うまい話はないと言つた直後にうまい話を提示する女の信頼性に疑問性を抱きながら、女はとぼとぼついていった。

*

「ま、入つてな」

「あ、お邪魔します……」

職安からキャリー・バッグを引きずつて約二分。泰葉が案内したその建築物はあいりん地区の中心街に軒を構え、「エヌ・ピー・オー法人・釜ヶ崎職業無料案内所」あいりんの壙^{ねぐら}という看板を表に掲げている。窓ガラスの内側には「女性や障がい者の強い味方・無料朝食付き」と白インクの手書き文字で書かれ、僅かばかりの集客能力を通りに向けて発信していた。

「あいりんの……つち、とき?」

「ハハ、読めんやろ? うちも読めへんかったけど、『ねぐら』ちゅうんやて。あいりんのドカタには読めへんやろうに、どないしてこんな名前になつたんか不思議やわあ。ささ、上がつて」

泰葉はホコリを被つた灯油ストーブの電源ハンドルを捻つてから、奥の黒ずんだ台所に立つ。

「朝メシ、うどんでええか?」

「あ、はい。頂きます……」

「よっしゃ」

泰葉はジャンパーを脱ぎ捨てて手を洗い、エプロンを上からかぶると、ポットの中に残っていたお湯をそのまま

ま寸胴鍋に空けた。

「お嬢ちゃんは東京から?」

「ええ、はい。今朝着いたばかりで……」

鍋のお湯がチンチンに沸いた頃合いを見計らって、お湯の中に冷凍うどんを二玉突っ込む。隣の雪平鍋では既にだし汁が沸き始めており、そちらには冷凍ネギの塊が放り込まれた。

「ここは釜ヶ崎地区……いわゆる『あいりん』に流れ着いた女性、老人、身体障害者などなど、比較的『社会的弱者』に分類される輩に日雇いの仕事をあつせんする、えーっと、トクテイヒエイリカツドウホウジン、ちゅうたかな? そんな施設や」

「はあ……」

「なんやなんや。ウチみたいなフーテンのその日暮らし^が、そないな社会奉仕の精神を遵守していることがそんなにも意外かいな」

「あつ、いえ、その、そういうわけではないんですけど……」

泰葉は茹で上がつたうどんを一旦ざるに揚げ、使い込まれた二つの漆器にきちんと等分する。それぞれに卵を

一つずつ投入し、鰹節をパラパラとふりかけ、上からアツアツのだし汁を注ぎ込んだ。湯気が立ち込めたら、即席うどんの完成である。

「ほれ、朝食。卵入りの出血大サービスや」
「あ、ありがとうございます……」

しばらくは喋ることもなく、淡々とうどんを啜る音だけが部屋に響いた。お互い久方ぶりに空腹感が満たされたからか、至福のひとときを過ごしていたのである。

*

「で……どれぐらいや？」
「ど、いいますと？」

「お嬢ちゃんはどれぐらいの期間、ここで羽を伸ばす予定なんや。一日？　一週間？　一ヶ月？　それとも一生？」
「そんなには……長くても一週間程度だと思います」

「さよか、そら安心したわ」

「安心、ですか？」

「実のところウチらの団体の目的はな、新しくあいりんに訪れた新参者を早いところ追い返して、よその街に定

住させることなんや」

「えっ、どうしてですか」

「そらーあいりんで何年も暮らしどったら、いつまで経てもうだつが上がりへんし、たいして生活が楽になることはないからや。それにあいりんの労働者が増えれば、ただでさえ少ない日雇いを奪い合うことになるやろうし、おまんまの食い扶持が減ってだーれも幸せにならへん」

「ずいぶんと割り切ってますね」

「あくまでトクティヒエイリカツドウホウジンの活動やからな。ウチらも仕事の案内さえ終われば西成市から手間賃はもらえるんやから、最後まで拭かんでもええケツやつたら拭く意味もあらへん」

「……ごもつとも、ですね」

「ほな腹も満たされだし、ぼちぼち適当にお嬢ちゃんの手続きも済ませしょか。お名前は？」

「……阿部、阿部公江アベキミエと申します」

「何か身分証明書は持つとる？」

「はい、今財布から……あつ！」
「ん？」

「ええっと、すみません、今はちょっと、その……今は財布に入れ忘れていたみたいで……」

「ふーん……ま、ええわ」

「えっ、むしろいいんですか？」

「ここやと運転免許証もマイナンバーカードも持つとる方少ないさかい。まあ、また思い出したらでええで」

「はい、そうさせて頂きます……」

「とはいえ阿部はんやら公江はんやら……ってのもむず

痒いやろ。ウチは適当に自分のこと、なんとなくお嬢様っぽいさかい、適当にお嬢って呼ばしてもらうで」

「あ、はい。お好きにどうぞ……」

もう既に大分呼んでるじゃないか、というツッコミは公江の胸中に留まったようだ。

「ほんでも紹介が遅れよったな。ウチは川端泰葉。ヤスハでもヤスでも好きに呼んでもろうてかまへん。エヌ・ピー・オー法人からあぶく錢をかすめながら、あいりんの新人案内人としてあくせく働いとるところや。現在独り暮らし、恋人募集中のアル中で、もう今年で二十八になる」

「えっ！ 意外と歳近いんですね。私、今年で二十六です」「おー、あいりんではかなーり珍しいぴっちぴちの若者やな」

「いやいや、そういうヤス姐さんこそ」

「はつはつは、とこでお嬢」

「はい？」

「もちろん今のは、見た目よりも若かつた驚きなんやろな……？」

「やだなあ、そんなの決まってるじゃないですか」

「はつはつはー……」

「ははは……」

お互に乾いた笑いをこだまさせているが、両者があたりん地区における希少な若者であるという点は事実である。二〇〇五年の人口分布統計によると、あいりん地区における四十歳未満の人口構成率はわずか十五ペーセントにも満たない。超高齢社会と化しているあいりん地区において、彼女らはまだ赤子にすら満たないので。

「はい、書けました」

「ご苦労さんっど」

こうして泰葉は、阿部公江に関する名前、前住所、年齢、性別など、最低限必要な情報だけ埋められた労働申請書類を受け取った。本来であれば顔写真付き身分証明書の番号控えや、電話番号などの記入を行政から要求されているが、ここではそういった情報が記入される場合の方が珍しい。念の為に西成署から手渡された全国指名手配リスト・家出行方不明の顔写真に目を通したが、似通つた顔の女性は目に留まらなかつた。

「よつしや。それじやお嬢はこれから『あいりんの壇』の保護下にある。何か困つたことがあつたら、気軽にウチまで連絡してな。ちゃーんとお上が定めた非営利団体やら、こちらから衣食住に關してあつせんすることはあつても、基本的に金錢を要求することはあらへんから」

「それは何よりです」

「ほな、次は衣食住の衣や」

「えつ。でも別に私、着替えは持つてきますし……」

「阿呆たれ。今着てるのと同じようなもんやろ？ そないにヒラヒラした服着とつたら、商売女かと勘違いされて

まうわ。朝みたいな女衒のおっさんに捕まるわ、脂ぎつ

たおっさんから『なんばや？』って聞かれるわ、ポリさんから職質かけられやすくなるわで、ええとこなんてまるであらへん。あいりんに住む上で、悲しいことに若いおなごのオシャレほど無駄な足掻きもないんや」

「そ、そうですか……」

ひょつとして全て体験談ですかね、という余計な一言は公江の胸中に留められた。

「まずジャージにジャンパーで色気を落とす。常にスッピン。金は一箇所の財布に收めず、足の裏やカバンに分割して入れておく。ここまで基本中の基本や」

「ずいぶんと厳重ですね」

「とにかく手持ちの現金は最小限にしどき。とりあえず今日のところはウチのお古を貸したるさかい、給金が入つたら、明日にでも向かいの古着屋でクツソみみたいにダッサいジャージとジャンパーを買うてきんしゃい。で、食は後にまわして、次は衣食住の住。特にこだわりが無ければ、上のドヤに住んでもらおか」

「はい、それでお願いします。上、ですか？」

「そ、このビルは二階三階がドヤになつとつてな。周辺

のドヤ価格帯と比較しても、格安で泊まれる。少しレトロを通り越して廃墟に近づいとるが」

泰葉は窓を少し開け、上に向かって叫んだ。

「おう、おっさんおるかー！」

「おうなんや、ヤスカ」

白髪混じりで熊面をしたヒゲモジヤの大男が、半纏姿にステテコという出で立ちで、のっしのっしと外階段を降りてくる。

「ウチの新人、泊めたつて。一日なんぼ？」

おっさんは指をスッと一本立てた。

「一週間やと？」

立てる指がスッと五本に増えた。

「なんやおっさん、コツスイ商売しとるの。お嬢はトン

キンから流れ着いて苦労しとるんやし、もうちつと負け

たらんかい。あ、せや。ウチの部屋二人で泊るんやつたら

どうや？」

小指と薬指が閉じられ、指は三本に減った。

「なるほど、ほなそれでいこか」

「あ、あの、つまり……？」

「ああつまりな、ウチと二人部屋やつたら一週間で三に負けといたるつて。これでええかな？」

「分かりました、三万円ってことですね」

「そうそう……へ？」

「あ、それなら大丈夫ですよ。今すぐ手持ちでも支払えるので、別に前払いでも……」

泰葉とヒゲモジヤのおっさんは思わず顔を見合わせた。一拍、間をおいてから、泰葉の下品な笑い声がドヤを響かせる。

「ぶつ、ぶつひやつひやつひや！」

「ええ……」

「いっ、一週間に三万つて……自分、おっさんのドヤが

どんな高級旅館やおもてんねん！」

「え？　は、はあ……」

「あ、安心せえ、お嬢。三万もいらへん、三千円で十分や」

「え……えっ！？　一週間宿泊で、たつたの三千円？　本

当に経営成り立つてんですか、それで？」

「くつくづく……今度は煽られとるで、おっさん

「じやかあしい、余計なお世話じや」

一応泰葉は一人部屋の方がよかつたか公江に訪ねたが、夜は心細いのでどうか一緒に居てほしい、と彼女は答えた。「部屋内で薬物・危険物を取り扱わない」「部屋内の貴重品は自己管理」云々の同意書に一筆書くだけでレジストレー・ションは完了し、即チエックインとなる。

「ほいじやお嬢ちゃんの荷物、部屋まで持ち運ぶで。よつ……とお！」

「おっさん、無理せんようにな。またギックリでも再発させたら、しばらく寝たきりやからな」

「じゃかあしいわい、まだまだこれでも若いもんには……うつ！」

おっさんは突如体を震わせたかと思えば、直ちに動作を停止し、キャリーバッグの持ち手を緩めてしまった。

「あっ！」

「ほら、おっちゃん！ いわんこっちゃない」

支えを失つたそれは階段に打ち付けられ、衝撃で緩くなつていたファスナーが緩み中身がぼろりと一気に漏れ出した。泰葉は慌てておっちゃんの救護に向かい、公江は慌ててその中身へと近寄る。

「痛ツウ……ああ、ほんま堪忍、ほんま堪忍なあお嬢ちゃん。おっちゃんぎっくり腰でな、お嬢ちゃんの大切な荷物を落としてしもうたわ……」

「えっ、いつ、いや！ 大丈夫ですよ、うん、全然」

「おっちゃん、少し布団かぶって休んどき。またぶりかえすとアカンから。荷物はウチが運んどくで」

「すまんのお、ヤス。ほんで、おっちゃんはお嬢ちゃんの荷物から、何を落としてしもうたんかのう。壊れてたら弁償もするけんのう。おっちゃんよう知らんが、何かゲームのカードっぽい見た目をしどつたが……」

「えっ！ こ、これですか？ ああ、はい、大丈夫です。ほら、こんな感じで、プラスチックのケースで保護してますから」

そう言つて公江は、プラケースで保護された三枚のカードを少しだけ泰葉の前に見せると、すぐに鞄へとしまいこんだ。

草原に咲く一輪の黒い蓮。

ピラミッドの前で耳を塞ぐ男性。

道に佇むのつべらぼうの骸骨三人組。

どれも妙に古めかしく、どこか幻想的な光景が部分的に切り抜かれたカード達は、泰葉の好奇心を捉えて離さなかつた。

「へー、これどしたん?」

「ええつと、実は親戚の子がこっちに住んでいまして、彼から借りっぱなしだったカードを返そうかと……」

「それでそんな古臭いカード、一枚一枚プラケースにしまつとるなんか。はあ、何や知らんがお嬢はマメやなあ」「一応借り物ですからね。ははは……」

公江の笑い声は、妙な乾きを帶びていた。

*

とりあえず上着を脱いで、薄手のセンベイ布団の上にゴロリと寝転がつた公江は、次第にウツラウツラと睡魔に襲われた。

「ほれ、寝とする場合ちやうで」

「うわっふ」

そのまま横になろうとした公江の顔面に向けて放り投げられたのは、くたびれた一枚の手ぬぐいだった。

「お嬢にはお昼から早速看板娘となつて、あくせく働いてもらわにやあかんからのう。これから客先に出るんじや、まずは銭湯行くで」

「銭湯……せ、銭湯ですか！」

「おお、どしたん？」

「私、入るの始めてです！」

「なんやお嬢、銭湯も入ったことないんか。こらひよつとしたら、ほんまもんの箱入り娘かもしれへんな」

「はい！ 私、今まで箱入り中の箱入りだつたんですよ」「えらいテンションの振れ幅が妙なやつちやな……」

部屋は和式の四畳半によつて構成されていた。本来一人住まいを想定している空間なので、流石に二人が入ると窮屈さを感じざるを得ない。

内装はちやぶ台、布団、テレビの三点セットで構成された、可もなく不可もなくといったところの一般的なドヤである。備え付けの古びたお茶パックと使い捨ての歯ブラシはサービスらしい。

*

カポーン、という洗面器の響きが風呂場の隅々まで染み渡った。

銭湯で肩まで浸かった時に喉から漏れ出る声と言えば、老若男女大差なく「あ」に濁点の入ったような发声として広く知られている。箱入り娘からはそこから輪を掛け上品にした艶っぽい声が漏れ出したが、泰葉からはそこから一回り濁らせたようなダミ声が漏れ出した。

彼女らの柔肌から疲れを可視化したかのような気泡が吹き出すと、水面へシュワシュワと浮かび上がり、大気中へと霧散していく。

「はあ……たまりまへんわ。人生初銭湯はどないなもんや、お嬢？」
 「た、たまりまへん、ですね……こんなに熱いお風呂始めてです」
 「ははは、さよかさよか……んえつ！」
 泰葉はその驚嘆を、思わず发声という形で外に漏らしてしまった。

九割が脂肪質で構成され胸部に位置する豊満な公江のそれは、なんと水面で浮力により微細な単振動を繰り返していたのである。それは決してやましい欲求からではなく、今後人生の見聞を深めるであろう知識欲に基づき、泰葉の視線を捉えて話さなかった。人体の一部が物理的にそういうた動作も可能であるという紛れもない事実を、泰葉は二十八年間の人生において始めて目の当たりにしたのである。

「どうかしましたか、ヤスさん？ ちょっと視線がやらしいですよ」

「いや、なんでもあらへん。ちょっと驚かされただけやさかい、なんでもないんよ……」

あいりん地区に銭湯は数あれど、ここ和光浴場は炭酸泉の庭園露天風呂付きという、あいりんらしからぬ高級感をもつた内装で広く知られている。仕事終わりの時間帯に皺くちやの老婆から揉まれて芋洗い状態にされようが、この時間帯から優雅に朝風呂を堪能しようが、入浴料金は常に一律で四百四十円だ。特にお昼前はほとんど日の雇いが出払うため、泰葉は二日酔いが覚めた頃合いを見計らい、ここで実質貸し切りとなる朝風呂をよく堪能していた。

「……ところでヤスさん」

「はいはい、なんでござんしょ」

「入る時に、入場の係員さんとごそごそ話してたのは何かあつたんですか？」

「は、はあ……」

「係員さん……？　ああ、番台の若旦那の事やな。あいつは昔からの幼馴染でな、ちよいとニュースでも見ながら世間話しどったのもあるけど、あれはな、番台さんに財布を預けとつたんや」

「財布、ですか……？　そういうえばヤス姐さん、部屋を出るとき私には貴重品を置いていけ、って言つてましたよね」

「せや、どうせ預けることになるしなあ」

「とはいえロッカーにも鍵が付いてますし、そこまで神経質に……」

「いやいや、あんなコソ泥のネグラみたいなロッカーに、貴重品なんか突っ込んでみい。ものの五分も立たずにパチられてまう……盗まれるで」

「え、本当ですか？」

「ホンマもホンマ。どうもこのコソ泥は全ロッカーの合

鍵をこさえとるさかいに、鍵かけてようが基本的に安心はできへん。番台のおっちゃんに預けるのが一番安全つてことやな」

「まあこれに限ったこととはちやうけどな。日本には日本の常識があるよう、あいりんにはあいりんの常識があるんや。公園に住むホームレスのテリトリリー、炊き出しの実施時間と場所、ドヤの選び方……。当然ながら良習も悪習もある。せやけど、全部ひつくるめてあいりんの習慣やどうちは思うとる。だから一部暗黙の了解になつてしまふた習慣を新参者に教えるのも、ウチらの大事な仕事ちゅうわけやな」

「おお、何だかかっこいいですね」

「よせやい照れやい。ほな次は、お嬢の身の上でも聞かせてもらおか」

「私の……ですか？」

「せや。要は何があつて、あいりんまで流れ着いたんかつちゅう話や。この仕事の楽しみの半分は、これを聞くところやさかい。あ、内容がヘビーやつたり犯罪スレスレ

やつたり答えたくなかったりしたら、適当にボカシ入れてもろてかまへんで」

「公江はしばらく考えた後、ぽつぽつと語り始めた。

「……とある小さな会社で、経理部の部長秘書を勤めていたんです」

「ほう」

「結構周りからは世渡り上手だって、褒められたんです。二十二で入社して、四年勤めて、大抜擢だって……」

「順風満帆やないかい」

「ところがその、経理の部長から熱烈なアプローチを受け始めたところから、どこか歯車が狂い始めたんです。その方妻子もいらっしゃって家庭もあるのに……」

「あら、禁断のオフィスラブ」

「ある日酔っ払った勢いで、彼は何度も土下座して、どうかやさせてくれって。そのうちにその、なんと言いますか、一線を超えてしまいまして……」

「ふーん、お嬢もずいぶんと安い箱入り娘やんな」

「言い訳したい所ですが、事実その通りなので何も言えませんね。それで一線を超えてから始まったのが、私に

対する粉飾決算の指示です」

「あれま」

「その会社の業績は良かつたんですが、税金逃れのために売上高を抑えた方の帳簿を表向きにしておけと。別に赤字を黒字に偽っているわけじゃないんだから、悪いことじやないんだって、延々とその行為の正当性をベッドの上で私に言い聞かせたんです。今思えば当たり前ですが、抱くところから含めて全てあの男の手のひらで踊らされていたんですよね、私」

「それで、用が済んだらポイちゅう話か」

「ご明察ですね。あとはマルサの介入が噂されて、責任追及が行われそうになつたらあの男は急に手のひらを返して……。あんな低予算ドラマみたいな展開が、まさか私自身に降りかかるなんて思つてもいませんでしたね。それでいいよいよ今日から本格的な調査が始まると聞いたので、持ちこめる荷物だけ持ち込んで、昨晩夜行バスに乗り込んだんです。だから今は溜めてた鬱憤を消化して、人生の有給休暇中です」

「いやいや、そらーお嬢アカンやろ。嫌疑者の逃亡と見

做されて、余罪が追求されるやつやん」

「詳しいですね、ヤス姐さん」

「お姉さんドラマ好きやから、こういうのよく知つとるで」「でもいいんです。これから捕まるとしても、このまま

どこかへ逃げたかったんです」

「ほなら、どないしてあいりんに流れ着いたんや？」

「昔ニュースで、殺人犯が潜伏していたっていう報道があつたんです。だとすれば、逃げる人間が向かう先としてはピッタリなのかな、と」

「そら悪い印象植え付けられとるなあ」

「そうですよね……すみません。地元の人にはこんな理由で来てしまって、申し訳ない限りです」

「まあ事実やししゃーない。まずはあいりんのイメージを切り替えていくところからや」

「……でも、今回ので十分に思い知りました。もうコリ

ゴリですね」

「粉飾が？」

「男ですよ」

「そっちかいな」

「散々口説き文句を垂れ流すのは口先だけで、気まぐれで抱きたい時に抱いて、利用価値がなくなったらポイ。私はおもちゃになりたかったんじゃありません」

「そらーたまたま悪い男に引っかかっただけやろ。お嬢ほどのべっぴんさんやつたら、男も選り取り見取りとちゃんとします?」

「そんなことないです。私、今の会社に入社するまで男性と触れ合う機会がほとんどなかつたんです」

「ほう……高校は女子高で、大学も女子大みたいな」

「その通りです。だから私の中での男性は、お父様か、少女漫画に出てくる王子様の二種類。まだよく知らぬ殿方

という存在そのものに、この歳になるまで神秘性や憧れを抱き続けていたんです」

「自分、童貞の対極みたいな女やな……」

「道程?」

「ああ、かまへんから続けて続けて」

「でも今の考え方は真逆です。つくづく自分が違う方の性別に生まれてよかつたと、心の底からそう思つてますね」

「ふーん……」

泰葉は両手の指を互いに組み込んで裏返し、うんと大きく背伸びをした。指先から水滴が零れ落ち、頬を伝つて首筋を滑り落ちる。

「ウチは、逆やなあ」

「逆、ですか？」

「そ。ウチはガキの頃から男に、特におっさんになりたかったんよ」

「それはまた……年頃の娘さんが語る理想とは到底思えませんね」

「いやいや、あいりんちゅう街はおっさんの街やから、何

だかんだでおっさんが住みやすいようにできとるんよ。お嬢はこの銭湯の入り口に貼つてある貼り紙、知つとるか？」

「知らないですね、今日始めて来たんで」

「よう聞いとき。『二十代三十代は男に成りたい。四十代

五十代は男でありたい。六十代七十代は男で死にたい。』

「何だか格好いいですね」

「せやろ？ 誰が言つたか、何の目的かも知らんけど。ウ

チは小学生の頃からこれを見て育つたもんやから、早くこうなりたかったんや。女に生まれたからこそ、男勝り

で、男よりも男らしい自分に成りたかった」

「あー……その気持ちは、何となくですが、少し分かります」

「ほんまに？」

「ええ、女子高でもそういう感じの子は多かつたんで。やっぱり周りが女の子ばかりだと、男の子っぽい女子が人氣だつたり……」

「ちやうでちやうで。そないなチャラチャラした、王子様的な理由とは間逆なんや」

「そうなんですか？」

「周囲から求められてその姿になるわけじやなく、ウチはただ周囲に溶け込みたいていう、どうしようもないほどに消極的な理由やから」

「消極的、ですか……」

それまで喧しさを前面に押し出していた泰葉の口から出てきた消極的という単語は、妙に公江の心を捉えて離さなかつた。

お互いが沈黙しそうになつた頃合いを見計らつたのか、おおつと、無駄話が過ぎてもうたな、などとわざとらし

く呟き、泰葉は浴槽から抜け出した。

「ぼちぼち仕度を始めたアカン時間や、お嬢、もう上がるで。こここの名物ブローバスはまた今度にしとこか」

「は、はい……ところでヤス姐さん」

「どしたん」

「その、この時間から始められるお仕事つていうのは、一

体何なんですか？」

「何や、まだ知らんかったんかいな！」

「そらヤス姐さんが教えてくれないからですよ」

「それもそうやな！ これからお嬢には、箱入り娘には

ちょいと厳しいであろう、地獄の激務をしてもらうで」

「じ、地獄……」

「その名も……」

「その名も……？」

「弁当屋や」

「弁当屋……？」

「おばちゃん、助つ人連れてきたで」

*

「おお、ヤス。ちいと遅かったんとちやう？」

泰葉と公江が弁当屋「まんぶく」に到着し、店に佇むしわくちゃの老婆からいきなり手渡されたのは、まず遅刻に対するお小言と、次に年季の入った黄ばんだエプロンだつた。

「新人さん？」

「は、はい。そうです」

「おにぎりセットは百円、日替わり弁当は二百円、大盛りが三百円。ええか？ 体に染み込ませて叩き込んだいや」

「は、はあ……」

相手に物言わせぬ老婆の凄みに対し、公江は生返事を返すことしかできない。

「ほな開店！」

開店と同時に現れたのは、午前中の勤労を終え空腹に身悶える大量の日雇い労働者達であつた。

「はい、大盛り一つ、こつちは日替わりやな。そっちはおにぎり二つ、普通一つ、あ、新人さん大盛り補充しといてや」

「は、はいっ」

「大盛り一つ！」

「はい、大盛り一つ入りました！」

「おにぎりまだ来とらんのやが？」

「はいっ、直ちに直ちに！　あの、ヤス姐さん！」

「はい、おにぎり一つ！　……なんやお嬢？」

「私、何でこんなにもみくちゃにされてるんでしたっけ

……？」

「決まつとるやろ、おまんまで稼ぐためや。はい、大盛りおまたせ！　手が止まってるでお嬢！」

「は、はい……」

それからもひつきりなしに来客は続き、泰葉と公江がようやく一息つく頃には陽も傾き始めていた。

「よし、山場も超えたし休憩や。新人も好きなん選んで、

胃袋にかつこんどき」

「は、はい……休憩入ります……」

公江は適当な弁当を一つ選び、店の厨房へと持ちこん

だ。奥では古びたテレビがガーガー音をかき鳴らしながらお昼の番組を放送しており、泰葉はそいつとにらめつ

こしながら飯を胃袋にかつこんでいる。

「お疲れ様です」

「おっ、お嬢もお疲れさん。初めてにしてはなかなかの手際やったやな。経理職で慣れとるからやろ」

「そ、そうかもしませんね。仕事柄激務はよくあることなんで……」

「そうやった。お金の扱いは慣れたもんやつたな」

「いえ、普段は紙の上でしか会計しませんし、こんなに百円玉を扱ったのも人生で今日が始めてです」

「そないなもんなんかな」

「そういうもんですよ……。あら、このお弁当、よく見る

と二百円とは思えない高クオリティですね」

「せやろ？　おばちゃんが毎日スーパー玉出で食材仕込んで、赤字覚悟で作つとるんや」

「へえ、味もなかなか……。きっと梅田のオフィスビルとかに出店したら、毎日ビジネスパーソンが買いに来るんじやないですか」

「ちやうちやう。あいりんで出店するからこの値段設定なんや。だからこそ数多く売つていかないとやつていいんのや」

「実際、飛ぶように売れてましたからね。いつもこんな感じなんですか？」

「せやな。これが毎日続くんや」

「ま、毎日ですか……」

「とは言え激務は昼だけ、朝は早起きせんでもええし、夜はぶらついてもかまへん。まかないもついとるし、キツイ土方仕事よりはいくぶんか楽や。これは釜ヶ崎で昔からよく言われてるわけでもなく、ウチが勝手に広めてる格言やけど」

「それってただの格言じゃないですか」

「あいりんの酒は命の水、あいりんの弁当は生命線言うてな」

「生命線？」

「食べる方はとりあえずおまんまにありつける、売る方はとりあえずおまんまの食い扶持は稼げる。せやから釜ヶ崎には弁当屋がぎょうさん連なつとるちゅうわけや」

「へー」

「ほなごつそさん」

「えつ。ヤス姐さん、いつの間に」

「早寝早食い早グソも芸の内や。ほな先に仕事戻つとるで」「あ、ヤス姐さん」

「なんや」

「パセリ残しますよ」

「じやかあしい、気にせんでもええわそんなど」

*

えらく間延びした防災無線の放送が、午後五時を告げた。「今日も終わりか」

気がつけば陽もとっぷりと暮れ、あいりんの町並みに夜の帳を下ろし始めた頃、弁当屋はひとつそりとその暖簾を下ろす。

この弁当屋に限らずあいりん地区における労働形態は概ね日雇いであり、その日働いた分の稼ぎはその日の終わりに老婆から支給される。裏を返せば明日またここで労働できる保証は、どこにもない。

「はい、ご苦労さん」

泰葉と公江に手渡された茶色の封筒には、樋口さんがちょこんと一人佇んでいた。公江が額を見て少し複雑な

表情を浮かべたのは、彼女が秘書を務めていた頃の時給換算と比較してしまったからであろう。それでも時給はあいりんでも高水準の部類に含まれる。

「おばちゃんおおきに。よし、じゃあ呑もか！」

「いいんですか、貯金とか宿代に回さなくちゃ……」

「いーやつ、今日ぐらいええねんええねん。宵越しの錢

は何とやら言うやろ。今日は初日祝いやしパーッと呑も呑も」

「そういえばヤス姐さん、アルコール中毒じやないんですか？」

「一日ぐらいかまへんかまへん。お医者様もお天道様も見てへんうちにや」

「大丈夫かなこの人……」

まず泰葉が案内したのは、弁当屋から歩いて数分のところに位置するホルモン串焼きの「やまき」だ。まだこの

時間だというのに、既にべろべろの客がカウンターにたむろしげつた返していた。店の親父は黙々と鉄板で串を焼き、ホルモンの焦げる香ばしい香りがもくもくと店外へ漏れ出す。

「ここはな、あいりんの酒呑み共が一軒目に訪れる事で有名なんや。ホルモン、キモをハイボールでサッと流し込んで、次の店に向かうのが乙つてもんやな。ほら、席空いたで」

「なかなか味があると言いますか、いい雰囲気ですね」

「お嬢はいくる口か？」

「お酒ですか？まあ人並みには呑めますよ」

「よっしゃ、今日は三十円奮発してビールにしたろ。おっちゃん、ホルモンとキモを一本ずつ。あとビール二本もらうで」

「えつ、勝手に取つていいんですか？」

「そういうシステムやさかい。後で自己申告で勘定するから問題あらへん」

「酔つ払つたら忘れそうですね……」

「ほいお嬢、まずはホルモン串や」

「え、ええつと。どうやつて食べるんですけど？」

「食い方も何も。串を取つてこのタレにつけこんで、口に放り込んで、ビールで流し込むだけや。あ、串カツのソースと一緒に二度漬けはアカンで」

「なるほど、これはニンニクが効いてて美味しい……」

「次はキモ。焼き上がったキモはもうニンニク醤油で味がついとるけん、少しレアな状態で口に放り込んで、ビールで流し込んだらええ」

「これも確かに美味しい……口の中でトロッといきますね」

「おっちゃん、お代はここ置いとくで。よっしゃ、お嬢。食べ終わったら次行こか」

「えっ！ ヤス姉さん、早くないですか？」

「まあ一軒目やしこんなもんやろ。缶ビールは歩きながら呑めばええ。それに早く行かんと、次に行く店が満員になつてまうで」

「せ、せつかち……」

「ええか？ セつかちは悪いことやないで、覚えとき」

*

「二軒目はここ、たつ屋。ちいとお値段は張るが、ここに来たらホルモン鍋を食わざるを得ない……」

「とはいえる鍋一人前で九百円ですからね、都内だと普通に二千円超えたりしますよ」

「ほら、こないにして豆腐、にら、もやし、キムチ、キャベツ、そして主役のホルモンがグツグツに煮えたぎって、一つの鍋を形成するんや」

「この香りは流石と言いますか……食欲をそそりますね」

「せやろ。けどまだ食べたらアカン。煮え立つまで呑みながら待つのが乙ってもんや。この店はにごり酒が日本酒と同じ値段やから、口当たりがよくて酔いやすいにごり酒を呑むんがベストや。つうことで、おばちゃん、にごり二つ」

「詳しいですね」

「伊達に長くは住んでへんよ」

「ヤス姉さんって、あいりんに来てから長いんですか？」

「なんや、ウチなんかに興味でも湧いたんか」

「ふと気になったもので」

「面白い話でもあらへんよ。ウチは十八で高校卒業して、それからずつとあいりん暮らし。もう数えで……十年になるなあ」

「それは古株ですね」

「そんじょそらのおっさんにはまだまだ負けるで。そ

れに、高校までは別のとこにおったからな」

「どこに居たんです?」

「大阪城のすぐそば……大阪市の児童相談所や」

「えつ、あつ……」

「いやいや、言うてもそないに気にする必要はあらへんよ。普通におかんがポツクリ逝って、普通におとんから虐待されて、普通に児相に保護されて、普通に新聞配達で生計を立てていただけや」

「ちよつとちよつと、普通に重い話じやないですか」

「まあ今はどつこい生きとるからな。人生結果オーライちゅうことで」

「あつ、ひょつとして……」

「ん、どしたん?」

「いえ、気に触つたらすみません。ひょつとして、朝の男に成りたかった、って話も……」

「まあそんなところや。確かに理想の子育てをしてくれるようなおとんに出会えなかつたから、つちゅうのも理由の一つかもしだれへんなあ。あるいは……」

「あるいは?」

「家に女をとつかえひつかえ連れ込んでくるような毒親を、一人の男とすら認めたくなかつたのかもしだれへん」

「それはまた……何と言ひますか、奥様を亡くされたシヨックが大きかつたのは分かりますが……」

「だからウチは男に成りたかつたというより、正しくは、そういう男よりも頼りがいのある女に自分が成りたかつた……のかもしだれへん。こうやって人を支援して、人から頼られる立場の仕事をしとるのも、何の因果かその延長になつとるしなあ。そういう意味では天職に恵まれたのかもしだれへんし、神様のの様仏様にも感謝せんとあかんな」

「そうですよね!」

「何や急に」

「昔がどうであろうと今が幸せならどーでもいいんです。私も会社の人間から束縛されていた頃に比べると、今の方が断然生き生きとしてますよ」

「え? それは困るわなし、犯罪者と一緒にされてまうわ!」

「ちよつと、大声で止めてくださいよ。まだ重要参考人

ですらないんですから」

「冗談冗談。さて、ぼちぼち食べ頃かな」

「そうですね、美味しいうちに食べましょう」

「こうやつてほろほろのホルモンを口に突っ込んで」

「はふ」

「にごりでキュッと流すんや」

「はふはふ……ほふ、ほほう、これはなかなか……」

「あつ、お嬢。締めはチャンポンか雑炊、好きな方を選び」

「ちょっと気が早くないですか、まだ一口目ですよ」

「ええからええから、どっち?」

「うーん……じゃあ、チャンポンにしましょつか」

「ほなウチは雑炊にして、はんぶんこしよか。おーい、おばちゃん」

泰葉は注文しに店主の方へと向かい、そのままテレビ

を話のつまみにしながら、やいのやいのと雑談を始めて

しまった。

一方で公江はノンストップでベラベラ喋る女からやつ

とのことで解放され、安堵から一息つき、ホルモン鍋を一

人で黙々と食べ始めた。公江はそのうちに、泰葉がいな

…」

くなるとこんなにも周囲の喧騒が聞きとりやすく、あまりにも自分が一人であるという事実に驚かされてしまつたので、にごりをちびちび呑みながら、昨日までの嫌な出来事をできるだけ早く忘れようとした。

「お嬢、卵と飯とチャンポン持ってきたで……お嬢?」

*

「ということでホルモンで腹も膨れて、お嬢も仮眠をとつてスッキリしたところで」

「いや、逆に酔いが冷め始めたんで、私は若干鬱々としてきたといいますか……」

「今日の〆は、安くでしこたま酒が呑める宅飲みや。公園呑みもなかなか乙なもんやが、まだちいと寒い季節やしなあ。ウチは昨晩もやつとつたが、まあお嬢に風邪でもひかれちゃ困るけんね」

「ヤス姐さんも、もう少し自分の身体を労ってくださいよ

「ちなみにカップ酒を買うときは、コンビニよりも自販機の方がごつつ安うなつとるからよう覚えとき。ほら、こも鬼殺しワンカップが百十円や」

「さつきから賞味期限切れのジュースとか一リットルの牛乳とか、一般社会からは逸脱した商品ばかり目に付きますね。あいりんの自動販売機って、一体どういう管理になつてるんでしようね……」

「さー知らへん。適当に安く仕入れた液体でも詰めといで、とりあえず売り切れるまで放置しとるんちやうん？」

「買う方も買う方ですが、売る方も売る方ですね……」「ささ、大閑もすごいももデルカップも選り取りみどりや。早う帰つて呑も呑も」

「えーっと……こんなに呑みます?」

「ええねん、余つたらドヤの共用冷蔵庫にでも突っ込んだいたらええ。気がつくと半分減つたりはしとるが」「それ絶対誰かに呑まれてるじゃないですか……」

時刻は既に十二時を超えていたが、近隣住民のご近所迷惑などを考える地域柄でもない。女二人のうち特に一人はやかましくかしましく、もう待ちきれず呑み始めて

しまつたワンカップを片手に、薄暗い帰路へとついた。

「今宵は星がよう見えるな。オリオンさんもくつきりや」「ヤス姐さん星座にも詳しいんですね、意外ですね」

「む、失礼な。あれがオリオンさんの左脇の下から生えている三角形で、あれがオリオンさんに足蹴にされとる小動物で、あれがオリオンさんに襲いかかろうとする猛牛やろ?」

「冬の大三角、うさぎ座、牡牛座ですか。なかなか覚え方しますね」

「むかーしまだおかんが生きとるうちに、真夜中に家族三人で星座を見に行つたことがあるんや。奈良の若草山までおとんが車を走らせて、原っぱに大の字で寝そべつてな。そん時におとんがベラベラ喋つとつた内容が、ウチの星座に関する知識の全てや」

「なるほど……星座はヤス姐さんとお父様との思い出といったところでしようか」

「そうそう、あの頃まだおとんがおとんをしとつたからなあ。若草山から眺めた星空はここと比にならんぐらいくつきり見えて、思わず幼心に心打たれてもうて……」

「感動しましたか？」

「そらもう、これこそ大阪市と奈良市が光源にかける金額の差なんやな、思うたら……」

「ちよっと、奈良出身の人が聞いたら怒りますよ」

「はは、冗談冗談」

あいりんの時までたどり着いた頃には入口の鍵も閉まつ

ていたので、二人は開け放しの窓からこっそり侵入した。四畳半を灯す無味乾燥の白色電球だけが、おっさんの代わりとなつて酔いどれた二人を迎えた。

「お嬢は何呑む？ ワンカップは大概呑んでしもうたから、デルカップしかあらんが……」

「深夜から呑む酒がこれでいいんですかね？ 仕方ないんで一本もらいます……」

「ほな、乾杯しよか」

「あ、乾杯です」

カップの瓶同士がぶつかり、心地よい音が響く。

「そうやな、ほいじやあ明日も平日やから、テレビでも見ながらちびちびやって、眠くなつたら寝る流れにしど

こか」

「はい、そうですね」
隙間なく敷いた二枚のセンベイ布団のうち入り口から見て左側を泰葉が、右側を公江が使うことに自然と決ました。泰葉がいくつかチャンネルを巡り、そこまで騒がしくもなく当たり障りも無いようなニュース番組が選局された。

「なんや、お色気系は今日やつとらんのか……なあ、お嬢」「どうしました？」

「その……今日はありがとな。こんなおばさんに一晩付き合つてもらつて」

「どうしたんですか。ヤス姐さんの若々しさでおばさんなら、私も同じですよ」

「それでその、今のようなウチとお嬢の仲になつたからこそ、言いづらくはあるんやけど……」

「なんですか、妙に歯切れの悪い物言いをしますね」

「お嬢、お願ひがある」

「はい」

「明日、警察に自首しよう」

*

どれぐらいの沈黙が滞留したのか、誰も分からぬだろうし、誰も覚えていないだろう。

「えーっと……ヤス姐さん、何のことでしょう？ 確かに私は不正経理に加担はしましたが、まだ監査も始まつたばかりですし、後々どうなるかは分かりませんが、今すぐに警察のご厄介になるわけでは……」

「自分、今日ニュース見たか？」

「え？」

『……続きまして、朝からお茶の間を賑わせております。こちらのニュースに関する統報です』

「ニュース。今朝からどこのテレビ局も、この話題で持ちきりや。銭湯でも、弁当屋でも、たつ屋でも……」「ちょっと待ってください。一体何の話を……」

『現在重要な参考人として全国指名手配中の○○△△△は、大坂市内で潜伏している可能性が非常に高いと見られ……』

「なあお嬢。公開されているこの『○○△△』って人の顔写真やけど」「……」

「髪型も、着ている服装も、目元も整形したのかだいぶ

違はあるかもしだへんが、どことなーく、誰かに似とるとは思わんか？」

「何言つてるんですか……私の名前は阿部公江だって、最初に……」

「一瞬見えたが、しっかり財布に入つとつたで。免許証」「ちつ……」

「おつと、いま素が出よつたな。あいりんは偽名を使う人間も多いからなあ。顔写真なしの偽造保険証ぐらいやつたら業者に頼んですぐ作れたのに、ちいとばかり準備が足らんかったなあお嬢」

「しっ、しかし……」

『被害額はおよそ三億円と見られ、ネット上では平成の三億円事件として、大きな話題を呼んでおります』

『ほら、三億円ですよ。それだけの被害額となると、持ち運ぶこと自体私には無理です』

「ま、現金ならそうやろな。せやかてこのご時世、紙幣を持ち運ぶ泥棒の方が少ないやろ？ 宝石、金塊、金券、色々手段はあるとは思うんやけど……実のところ、グラムあたりの単価が非常に高額で、一番持ち運びがしやす

いのは」

泰葉はキャリーバッグを指さした。

「あのカードやろ？ 親戚の子に返す言うとつたが、どうもとんでもないもん代物みたいやな。特にあの黒い蓮

やと、ウン百万円は下らないんやつてな」

「……意外とお詳しいんですね」

「銭湯屋の卒が昔遊んどったんで、今朝ついでに聞いてみたんや。貴金属と違つて管理もしやすいし、一見するとただの古ぼけたカードだから、知らん人間には価値がさっぱり分からへん。ウチを含めてな。それにトレーディングカードつちゅう性質上使う人もおるから、人から人の行き来がしやすい。なかなかうまい手やと思うけど、

これはお嬢が思いついたんか？」

「いえ……例の経理部長の趣味です」

「せやろな、ということは売上隠しのためちゅうことかな？」

「ま、その通りですね。いやー……ははは」

わざとらしく発せられ乾ききつたその笑いには、どこかほつとした安堵も含まれていた。

「一週間ぐらい潜伏するつもりでした가、あっさり一日で明かされちゃいましたね。ご明察、流石ヤス姐さんです。それで、次はどうします？」

「で、ウチからの提案は、明日自首せえへんかちゅうらけや。別に強制する気もあらへんし、もう少し長居してもかまへん。それこそあいりんやつたら一週間は気づかれへん。せやけど、潜伏すればするほど裁判では不利になる。逆に明日自首すれば、まだ情状酌量の余地があるかもしねへん。ウチはお嬢に、若い間の時間を大事にしてほしい。せやから……」

「どうしたいですか？」

「え……？」

「逆に泰葉さんは、どうしたいですか？ 今すぐに私を通報しますか？ 百万か二百万、おこぼれに預かりたいですか？ それとも……」

公江は古びたジャージのファスナーを、上から下までをすっと下ろした。薄いタンクトップが透けて、内側に潜む下着のレース柄が顔になる。

公江は過剰なまでに、汗をかいていた。

「……どうして？」

「すぐに分かりましたよ。お風呂の時、ずっと見ていたじゃないですか。泰葉さんにとってこの仕事の楽しみの半分は、あいりんに来た理由を聞くことだったみたいですけど、ひょっとしなくても残り半分はこっちなんじゃないですか？」

「公江はわざとらしくポケットから取り出したスマホをいじる。

「どう思いますか？　あいりんに訪れた若い女性ばかりを狙つて食い物にし、被害者は泣き寝入りするしかない『レズの紹介人』さん」

「どないして、そのことを……」

「インターネットは便利ですね。お隣さんが知らないことも、法人の名前で検索をかければ、レビューには全て書かれてますから。なんでも、お酒に睡眠薬を混入するのが得意のようですね。ひょっとしたら、これにも」

「あ。

「公江はデルカップのグラスを傾け、その琥珀の液体を艶めかしく凝視した。

「もう何か細工されたりしていますか？」

「ははは……こら、一本取られたわ。晴れてお互に犯罪者、ってわけやな。」

公江はデルカップの蓋を締め、ゴミ箱に放り込んだ。

「どうする？　一緒に自首でもしよか？　一昔前やただの傷害未遂やったが、今なら強制性交等未遂で立件できるで」

中の液体がゴミ箱の中身に染み渡り、甘い匂いが部屋に充満する。

「さて、そろそろ寝ましょうか」

「……ほんまにええんか？　レズの強姦魔と添い寝するよりかは、西成警察署のブタ箱のが幾分安全やと思うが」

「別にいいですよ……そもそも」

公江はテレビのスイッチを消し、蛍光灯の紐を一度だけ引いた。薄暗い部屋の中、お互いの顔だけが浮かび上がる。

「そもそも、こんな薬なんかに頼らなくとも別によかったんですよ。私にとっては男性との付き合いの方が、お試しみたいなものでしたし」

公江は半分脱がしかけていたジャージの上着を一気に

夜をささやかに慰めた。

脱ぎ捨て、備え付けのタオルを一枚手に取った。
「それじやあ私、少し汗を流しにシャワーを浴びてくる
んで……んぐっ！」

次の瞬間、公江の唇から泰葉の冷たい舌を通じ、呑み

かけの大関が無理やりねじ込まれていた。

荒々しく凶暴で、優しさの欠片もない接吻に対し、公江は反射的な抵抗を頭にしたもの、既に両手首を抑えられていたため、足を引っ掛けたバランスを崩した結果、センベイ布団の上に寝転がされていた。

泰葉はそのまま馬乗りになると、両手でタンクトップの首元を乱暴に握りしめ一気に胸元まで引き下ろした。緩くなつた肩紐が伸び切ると両肘が拘束され、タンクトップの首元がいい塩梅に乳房の下へと食い込んで抜け出せない。他の女で何度も試したのであろう、その仕事ぶりはあまりにも手慣れていた。

「なんでしようか」

「もう少しだけ……ここにとどまってくれへんか。西成はアレやけど、新世界にはまだまだ見どころがあるで。天王寺動物園のトラ、国際地下劇場のピンク映画、昔ながらのスマートボール、それから車でも借りて、若草山の夜景でも見に行こな。ウチな、今はお嬢と色々な場所を

「なあ、お嬢……もう起きとるか」「……まだ寝てます」

あいりんの朝は早い。スズメがちゅちゅんと鳴く頃には、既にあいりん労働福祉センターは日雇いでごつた返しているだろう。

「センベイ布団の上でピロートークつちゅうんも、色気もへつたくれも無くて申し訳ないな」

「いいですよ……どうせ今夜だけの関係なんですから」「なあお嬢、お願いがある」

「なんでしようか」

ただ獣が贊を貪る、淡々と続く食事の時間。
そこには言葉も相互理解も無く、満たされるのは一方の愛欲のみ。
時折部屋から漏れだす喘ぎ声は、独り身である隣人の回つてみたい」

*

いや、特にいいです

「乗り気やないんか」

いや、泰葉さん、でレイアした後で普通に優しく接す

るあたり DV男の素質ありますよね……】

なんやつれへんなあ、もうヤス姉とも呼んでくれへんし

一気が変わったんですね。ちょっとトイレ行つてきますね

お嬢。最後に――頼みたいことがあるんや。聞い

てくれるか？】

「至れり、ほゝじや持つてらが」

はじめ泰葉はしづらくトイレ

はじめ泰葉はしばらくトイレに籠もつたきりで外に出

てきただのうとうとしてしまい、はつとして二度寝から

目覚めると、既にキヤリーバッグが部屋から姿を消して
いた。

ちやぶ台の上には三千円と、書き置きで一言だけ残さ
れていた。

「気が変わったんでお先に失礼します。やつぱり泰葉さんは、ここにさまよつた人をフォローしてあげてください

い。またいつか

泰葉の喉から、叫びにも似た苦しい嗚咽が漏れ出した。

*

ひよつとしたらまたすぐに帰ってくるかもしれない、といふ泰葉の淡い期待もほんの三十分で潰えた。

泰葉はむしやくした癩癩を鎮めるべく、目的もな

く外をふらふらと散歩していると、職安の前にできてい

る人がかりかいよりもよりも長引いていることは気がいた

「」

一ノンタリ!

どうもただの日雇いだけでなく、あいりん職業安定所の取り壊しに反対するべく集つた、日雇いの労働組合員も含まれている。

なんや、取り壊すんかいな、ここ

寝床が失われる人々には申し訳ないが、この古ぼけた街が少しずつ変化を遂げて いる様子を見て、泰葉は少しばかり気持ちが和らいだ。

「そういや来月には、ぼちぼち新元号も発表やつたな……」

平成の暗部に取り残されたこのクソつたれな街から連れ出してほしい、という泰葉の頼みも、結局公江まで届くことはなかつた。

泰葉はポケットからボロボロの手帳を取り出した。

これはあいりんに今まで訪れ、泰葉と関係を持った女性を列举したリストでもある。泰葉は出身地、好きな食べ物、血液型、性癖から行為の回数、恥ずかしいほくろの位置に至るまで綿密な記録を怠らなかつた。既に彼女たちはあいりんを離れ、唯一人、泰葉だけが今も取り残されている。

泰葉は職安のパイプ椅子に腰掛けると、乾燥したボルペンの先を軽く舐め、筆を走らせる。彼女は公江（仮名）に関して覚えている情報を、忘れる前に書き込みながら呟いた。

「今回は、何がいかんかったんやろなあ……」

甘い煙に誘われて

片桐天音 (@amane_katagiri)

strawberry I

人が流れる歩道の中で、タバコの香りにつられてふと立ち止まる。

街を歩いていると、ときどきこんな風に甘い匂いが鼻をくすぐることがあった。甘く煙たいストロベリーの香り。普通に歩いていたら見過してしまいうような、そうでなくとも数歩のうちに意識の外へ追いやられるような、かすかな心地よさが私の足を止めた。

私はこの匂いを知っている、と思った。鼻をすんと動かしているうちに、さっきまで食べていたサンドイッチの香ばしい匂いなんて全部吹き飛ばされてしまう。もやのかかった空気の中で、私は煙に包まれたあの頃の甘いひとときを思い出していた。

喫煙所は禁煙の波に追いやられた人でごったがえしていく、とりわけ奥はスーツ姿のおじさんばかりだ。きっと、大きな肩に挟まれた窮屈な空間でタバコを吸うのが嫌なのだろう。その気持ちは分からぬないけど、マナーの悪い女だなと思う。

甘酸っぱいストロベリーフレーべーをくゆらせているのはこの人だ。

ウェーブのかかった茶色いロングヘアにクールな瞳が隠されて、時折空を見つめながら煙を吐いている。サ

生き急ぐ時間の流れを傍観する感覚に身を委ねていた。

おそらくこの甘い香りを漂わせているのは、そばにある喫煙所だろう。明るい緑色に塗られた柱に、上半分がフロストガラスで囲まれた半透明のシェルターは、彼らの身なりをそのままに顔だけを隠している。まるで犯罪者が風俗嬢みたいだな、と思う。

イケデリックなテディベアの写真が縦横にプリントされた趣味の悪いシャツに、くすんだ青のブルゾン。ライトブルーのデニムと紐の汚れた黒のスニーカーに寄り添うピンクのスケートボードは、そのフットワークの軽さを物語っている。およそ会社勤めには見えないし、下手をすると大学生ですらないかも知れない。

吸つて、吐いて、画面をなぞる……その動きがいちいち氣だるげで、あくせくと流れる時間から浮いて見える。

どうしてみんな、タバコを不味そうに吸うんだろう。まりつペもそうだった。身体中にもくもくとした煙をまとめて、そこから何が見えるのだろう。

その様子をしばらく眺めていると、彼女はまだ大いぶ残った吸いさしを口から離して、足早に喫煙所の中へと向かっていった。頭一つ小さなデニムパンツが灰皿まで駆け寄つて、吸殻を突っ込んでから出てきたと思うと、立ち止まつていた私に視線を向ける。慌てて目を逸らすけど、誰も寄せ付けまいとする視線は確かに一瞬私を貫いていた。

しかし、彼女は自分が観察されていることを意に介す

様子もなく、スケートボードに乗つて線路沿いの裏通りに消えていった。

ストロベリーの残り香が、少しずつ灰色の煙に追い出される。ぼんやりとした懐かしさがコントラストを失つて、そのまま現実に戻されていく。彼女の痕跡はもう私の記憶にしか残っていないのに、どうしてか私はその場から動けずにいた。

どうしてだろう？ スケボーの彼女の視線に、まりつペと同じものを——もしかしたら、まりつペの面影を感じていたのかもしれない。私の隣では、いつもこの甘い匂いがしていたから。

secret 1

私がまりつペの「秘密」を知ったのは、高校二年の冬のことだった。

今でもよく覚えている。寒さと暖かさが曖昧になつた放課後の穏やかな日差し。柱の向こうから聞こえる砂利を踏みしめるざくざくとした足音。そしてあの、ストロ

ベリーの甘い香り。普段よりも少し強い風が、まりつペの吐いた煙をそのまま私に届けてくれたのだ。

「ね、ねえ赤沢さん？ それ、タバコ……だよね？」

「あら、C子だったの」

まりつペは突然の邂逅に驚く様子もないまま、顔をちらと覗いてから私の名を告げた。誰か——つまり、私の気配はもう感じ取っていたらしい。火を着けたタバコを隠す様子もなく、軽く目を閉じてまた口元に運ぶ。細い芯の中を走る煙を優しく吸って、口からもくもくと吐き出した。

腰まで伸びたロングヘアは二つにまとめられていて、上に向いてふう、と息を吐くたびに、その動きに合わせてゆらゆらと揺れる。青みがかった煙が風に流されて、その綺麗なツインテールと混じり合っていくように見えた。煙がかき消えるとまたふわりと甘い香りが漂って、私の視界にぼんやりともやがかかる。

タバコってツンとした嫌な匂いのものばかりだと思つてたけど、こんなに心地いいなんて。いつものタバコが灰色の匂いだとしたら、これはまるでピンク色の匂いだ。

煙と一緒にゆったりとした時間が流れていく。それは窓際の机でまどろむ放課後よりも、駅のベンチで次の電車を待っているときよりも、もつとゆったりとしていておぼろげな時間だ。ずっと向こうに部活の練習風景が聞こえてきて、まるでここがいつもの学校から遠く離れた場所のように思えてくる。

そうして煙が消える様子をひとしきり眺めていたまりつペは、しばらくしてから私に向き直った。

「それで、何か用？ さっさと先生に言いに行つたら？」
「ち、違うよ。私、そんなつもりで来たんじゃない」

もちろん、私が補習をサボってまで校舎裏に回り込んだのは偶然ではない。まりつペの後ろ姿を追つて歩いていたからだ。でも、決して彼女の喫煙を咎めるつもりで尾行ていたわけではない。まるで路地裏をするすると歩く猫に導かれるように、奇妙な魅力が私を支配していたのだ。

姿を見せちゃいけない、と思った。尾行に気付かれたら、まりつペが私をスパイとして疑うのは当然だったから。
それなのに、いつの間にか足が前に出ていた。甘い香

りにつられるように、格好悪く彼女の前に姿を表してしまった。

それは、喫煙という意外な光景を目撃したせいでもあるだろうし、ただ彼女に私の存在を示したかったからかもしれない。私だけは味方だよ、とでも言うように。

「そう。別に、何でもいいけど」

壁に寄りかかったまりつべが私を見下ろす。ふわりとしたスカートの裾が、薄い太陽の光で綺麗なグラデーションを作り出していた。

まりつべ（当時は赤沢さんと呼んでいた）は、私のクラ

スマートだ。背の高いまりつべのスカートから伸びた脚はすらっと長くて、廊下でそれ違うたびに目で追ってしまいくらい。歩く姿も美しくて、細やかな動き一つ一つにまりつべの意識が込められているのが分かる。

同じ制服を着ているはずなのに、ちんちくりんの私と

は何もかもが違う。背伸びすればやっと追い付けるくらいの意志の強い瞳が、整った顔の魅力をさらに高めていた。

「でも、どうしてタバコなんて……」

「吸いたくなつたのよ。そんなに変？」

「だって、見つかったら退学だし」

「いいのよ、別に。高校なんて」

まりつべはそう言って、またタバコを口にくわえた。悪い事をしているはずなのに、彼女は逃げも隠れもせずに私の前に立っている。私を脅すわけでもなく、自分の「非行」を隠すわけでもなく、その姿はまるで駅前のカフェで紅茶を飲む時のように落ち着いていた。

どんな言い訳をしたって喫煙は喫煙だ。咎めなきやいけない行為のはずなのに、今はその姿がなぜだかとても綺麗に見えた。

「タバコくらいで騒がないでよ。私のことなんて誰も見てないわ」

「……私、赤沢さんのタバコのこと、もう知ってるけど」「脅しのつもり？ 言ってるじゃない、高校くらいやめてもいいって」

鋭い視線が私を貫く。

高校くらいやめてもいい、なんて。私にはまりつべの気持ちが分からなかつた。高校進学を選んだ私たちの人生は、おそらく中卒なんて考えていられてはいないから。少なくとも、私にとつてはそうだ。だから、まりつべにも

そんな人生を送つてほしくはない、と思つていた。

でも、迷いも不安もないまりつペの目を見ていると、その押し付けがましい親切心に彼女を巻き込むのが本当に正しいのか、分からなくなってしまう。

「そ、そうじゃなくて……」

「はつきりしなさいよ。これをネタにして、脅すつもりなんでしょう？」

これ、と言いながらまりつペが火の付いたタバコを目の前に突き出した。まるで、常識に縛られた空っぽな自分を見透かされているような気がして、私は思わず目を逸らしてしまう。

私は彼女の視線から逃げるよう、タバコの先から出る煙をじっと見つめていた。そうして黙つたままでいると、まりつペは小さく溜息を吐いて、ブレザーのポケットからボタンの付いた黒い革のケースを取り出す。

「……もういいわ」

不機嫌なまりつペは、彼女に似合わない無骨な携帯灰皿に吸い殻を押し込んで、そのままこの場から立ち去ろうとする。ざくざくとした足音がだんだん遠くなつ

て、少しづつありふれた日常の空気が戻つてくるのを感じていた。張り詰めた空気が少しづつ緩んで、身体から力が抜けそうになる。

今何か言わないと、まりつペはもう私を見てくれなくなってしまう、と思つた。

「ち、違うよ！」

地面をぐつと踏みしめた勢いで、思わず大きな声が出てしまう。まりつペが足を止めてから、これが秘密のやり取りなんだと思い出して、意味もなく口に手を当てる。振り向いたまりつペと目が合つて、彼女はふふつ、と小さく笑つた。

「でも、もう学校では吸わないで」

「あら、学校じやなきやいいってこと？」

「うん。私……赤沢さんに、学校やめてほしくないから」

そう告げながら、私は思わずまりつペの手を握つていた。突然距離を詰めた私に、まりつペは戸惑いの表情で私を見つめるだけで、驚いた声さえも上げられない。

「ねえ、赤沢さん。やめないで」

これは私のわがままだ。分かつていた。まりつペが高

校をやめて困るのは、私の方なのだ。もし今日、校舎裏で彼女を見つけたのが私でなかつたとしても、まりっぺには何も気にしないだろうから。まりっぺは、誰の救いも求めていない。まりっぺを救うふりをして、本当は私が救われたいだけなのに。

まるで、プロポーズでもした後のような長い沈黙が流れた。私の告白じみたお願ひを、まりっぺはどう思つてゐるだろうか。私の髪が揺らした風が、まりっぺのスカートも揺らしていく。その一瞬一瞬が恥ずかしかつた。

「私のことは私が決めるわ。でも、C子が私を守りたいなら、勝手にして」

ひんやりとした手が心地いい。まりっぺはいつの間にか不意打ちに崩されたはずの冷静さを取り戻して、私をじっと見つめている。

「……うん。ありがとう、赤沢さん」

受け入れるわけでもなく、突き放すわけでもない。まりっぺらしいその答えが何度も私の頭の中を駆け巡つて、やつと実感と共に私の顔を熱くする。まりっぺと私だけの秘密ができたこと。まりっぺと手を繋いでいること。私

がまりっぺに受け入れられたこと。突然訪れた幸せが、私を包み込んで離さない。

結局、まりっぺが連絡先を交換しようと告げるまで、私たちはずつと見つめ合つたまま手を繋いでいた。まるで恋人みたいに。

まるで、恋人みたいに。

*

校舎裏での出会いから数日が経つた。昼休みの教室はざわざわとした取り留めのない会話で満ちていて、とにかく落ち着かない。年度末の浮ついた解放感がひしひしと伝わってきて、今の私には鬱陶しく感じられる。こういう微妙な気分のときには図書室に行くに限るんだけど、まりっぺとのこともあってなかなか動けずにいた。

教室でのまりっぺは、いつもと変わらず私の三つ後ろの席で静かにファッショントーク誌を眺めている。教室に出入りするたびにちらりと彼女の方を見ていたけれど、目が合うことはなかつた。私を信頼してくれているのか、それとも……本当に、高校をやめるつもりなのか。

いや、私はちゃんとまりつべを守ると「約束」したんだ。まりつべが学校をやめたりしないように。まりつべの綺麗な姿を、私と彼女の静かな時間を、誰にも見せないと。だから、まりつべがいなくなるなんてありえない。

でも、私はどうやってまりつべを守るつもりなんだろうか。まりつべに頼られたって、停学さえ覆すことはできなのに。できることなんて、タバコを吸っているときの見張り番くらい。私がまりつべと一緒にいる価値があるのは、煙たくて気持ち良いあの場所にいるときだけ。

私たちの関係は、密かに立つ煙と同じくらいに優しくて弱々しいのだ。

まりつべは高校くらいやめてもいい、と言っていた。私の動きに关心がない様子を見ると、それは本当の気持ちなのだろう。でも、学校をやめてどうする気なのか、親にはどう説明するのか……そこまでは、現実味がなくてイマイチ想像が付かなかった。つまり、みんなが選ばないような生き方に向き合いつつあるまりつべの後ろ姿が、少し怖かった。

「まりりーん。何読んでるの？」

そんな考えを巡らせながら窓の外を眺めていると、後ろから耳障りな声が聞こえてくる。こんな時でも、B子はやはりまりつべに馴れ馴れしい。

「今月号のロルムよ。春の新作をチェックしてるの」

「えー、遅くない？ 私、もうめぼしいのはいくつか買つてるよ」

「そうなの？ どこのブランド？」

「まあ、——とか、——くらい？ そんなに迫ってるわけじゃないけど、教えてあげよっか？」

「そうね、——は——だけど……私は——だから、別にいいわ」

同じクラスのB子は、性格の悪い女だ。気の強そうな顔に、わざとらしくてうるさい声。下品に着崩した制服は似合ってないくせに自信たっぷりで、自分が一番可愛いいと思つてるのが透けて見える。まりつべの足元にも及ばないくせに。

それに、まりりん、だなんて馴れ馴れしいあだ名を使うのだ。まりつべと秘密の約束をした私でさえ、まだ名前さえ呼べていないのに。なんて図々しいやつなんだろう。

取り巻きとばかり遊んでいるから、他人との距離感も分からぬのだ。

きっと、まりっぺだつてうんざりしてゐるに違ひない。

B子はまりっぺが怖いんだ。B子をちやほやしないど

ころか、自分に集まるはずだつた視線さえも奪いかねないまりっぺ。そんなまりっぺが自分に見向きもしないとなれば、どうにか興味を引こうとするのかもしれない。所詮、まりっぺの魅力には勝てないのである。

そんなB子が上から目線でまりっぺに突撃していくのを見ると、腹が立つて仕方ない。いつも周囲にお友達を連れて楽しそうにしているんだから、そいつらと遊んでいればいいのに。

「でも、まりりんにはこういうのも似合うと思うよ。どう、これとか？」

「え、ええ……ありがとう。参考にするわね」

いらっしゃる。後ろを向いてB子を睨みつけてやろうか。そう思いながら、解く気もしない問題集のページの端をこつこつとシャーペンで何度も叩いていると、芯がぱきりと折れてしまった。

「……はあ」

でも、今は落ちてしまつた小さな欠片に氣をかける余裕もない。私は溜息を吐いてから、芯のないシャーペンをまたかつかつと紙に叩きつける。

おい、まりっぺが迷惑そうにしてるだろ。笑うな。喋るな。出でけよ。……今すぐ立ち上がってB子にそう突きつけることができれば、どんなによかつたろう。でも、そんなことを叫んだら、まりっぺはどう思うだろうか。タバコを吸つていない彼女に、私は何ができるだろうか。

だつて、私とまりっぺは灰色の糸で結ばれているのだ。手繰つてているうちに広がつて消えてしまいそうな、煙のように弱々しい糸で。不意に風でも起こしてしまつたら、その糸はぶつりと切れてしまうだろう。それが怖くて席を立つことすらできずにいた。

「それでさー、まりりん。放課後、カラオケ行かない？」

今日は——と——と、あと——くんも来るんだけど

「うーん……ごめんなさい。今日は家の用事があつて」「この前もそう言つてなかつた？ セつかく誘つてるのにさー」

それから、B子は仲の良い友達みたいにへらへらと二言三言発した後、「じゃあね、まりりん！」と言つて教室を去つていく。

B子が退散するのを横目で見届けて、私は正直ほっとしていた。まりつペの作り笑いを見たくないのに、私には見ていてことしかできないから。静かに身を守ろうとしている自分のことを、じつと見つめていたくはなかつたから。

「でもさー、私、仲良くしようとしてやつてるんだよ？」
「Bは優しいなあ。私、顔に出ちゃうからそういうことができないもん」

＊

＊

「私、赤沢さんのこと、やっぱ苦手だわ」

「Bちゃん、落ち着いて。ここ、一応学校のトイレなんだし」

B子はまりつペにあしらわれた後、決まってトイレで取り巻きにまりつペの悪口を吹き込むのだ。今日も例に漏れず、怒りに任せてまりつペの悪口をあることないと言ひふらして、取り巻きその一に宥められていた。私は個室でその様子を聞きながら、じつとB子の愚かさを実感している。

B子は窘められたり煽られたりしながら、まりつペの悪口を繰り返す。容姿のこと、ファッショントイレなど話しているうちにB子は興奮してきたのか、途中から「赤沢」と呼び捨てにし始めた。「まりりん」だなんて寒気のする甘い声は全部演技で、こうやって取り巻きの前で調子に乗るのがB子の本性なのだ。

「ねえ、C子！ あんた、赤沢のこと好きでしょ？」

と、突然B子に名前を呼ばれて、身体をびくつかせて

しまう。いつの間にか尾行に気付かれていたらしい。彼女たちから私の姿が見えていないのは分かつてたけど、少しでも物音を立てたら動搖が悟られてしまふと思った。黙つてやり過ごそうと思いながら身体を縮こめていると、勢いづいたB子はさらに言葉を続ける。

「私が赤沢の悪口を言うの、いつも聞きに来てるよね。告げ口でもしてんの？」

「えっ……○子ってそうなの？」

「ねー、どうなの？」

まりっぺがお前らみたいな卑怯な真似をするわけがない。告げ口なんて頼まれるものか。根拠のないまりっぺの悪口に一つ一つ反論してやりたい気持ちはあるけど、三人を相手にはつきり自分の言葉を伝えるような勇気はなかつた。

と、出るに出れない空気の中、突然ポケットの中で何かが震える。着信だ。気付かれないようにそっと携帯を取り出すと、通知欄が「赤沢まり」と白く光っているのが分かった。

【今日、付き合ってくれる?】

どうしてまりっぺからメッセージが？ そうだ、この前連絡先を交換したんだった。突然の出来事に、少し混乱する。初めて私に送られた短いメッセージを何度も読み返しているうちに、まりっぺの「今日は家の用事があつて」という言葉を思い出して、顔が熱くなつた。

「ごめん。ちょっと行かなきやいけないから！」

私は個室の扉を開けると、いつの間にか走り出していた。後ろから聞こえる「おい、待てよ！」という声がなぜか滑稽に聞こえて、妙な笑いがこみ上げてくる。

お前らにまりっぺの魅力が分かるかよ。まりっぺのことを知っているのは私だけなんだ。分かつてあげられるのは私だけなんだ。心の中でそう唱え続けているうちに、B子のことなんか気にならなくなつていた。

nickname 1

それから私は、いろいろな場所でまりっぺの「非行」に付き合つた。マンションの非常階段、人気のない公園の

隅、手入れされていない神社の裏——当然、そういう場所ではいつも二人きりだ。ネットで調べたところ、何度も同じ場所を使わないのがコツなんだという。場所選び以外に人目を避ける特別な対策はしてこなかつたけど、幸いなことにこれまで喫煙の現場は見つからずに済んでいた。

夕日が当たる古い団地の屋上は、色々なものの時間が止まっている。建材はまだらに黒ずんでおり、所々に錆

が流れ込んでマーブル模様を作っていた。雨が降ると隅に集まつたごみがまた広がつてしまふから、今日みたいな晴れ続きの日にしか使えない。コンクリートの床材や貯水槽の鉄骨が濡れていると、まりっぺは嫌な顔をした。

悠々とタバコをくわえるまりっぺ。微妙に囁み合わない

二人の間は、いつしか沈黙で満たされていく。私はそのぎこちない空気が初々しい恋人同士みたいで好きだつたし、まりっぺも、そういう奇妙な静寂を楽しんでいたと思う。週に二度か三度は、こうして青春の黄昏みたいな時間を見静かに過ごしていた。

まりっぺは、タバコを吸いながら私にいろいろなこと

を話してくれた。

「私、モデルになりたいの」

ロリータファッショング好きで、昔から自分で服を作っているらしい。既製服の可愛いポイントを取り入れつつ、高身長を活かしてオリジナリティを摸索している、とか。ロリータのことはよく分からぬ。

今日は、裾にぐるりとチャーリーが散りばめられた黒いワンピースだ。首元にはU字に大きく白いフリルが入っていて、金色のボタンがよく目立つ。大きなリボンはスカートと同じチャーリー模様で、まるで綺麗な返り血みたい。ツインテールを留めるシュシュは服に合わせた白黒で、そこにストロベリーのチャームを添えてシックな色合いをカバーしている。

確かに、まりっぺのファッショングへのこだわりはすごいと思う。私は動きやすいようにデニムとスニーカーで付き添つてたけど、まりっぺは何度言つてもふわりと広がるロングスカートだけは絶対に譲らないのだ。逃げやすさのことは二の次らしい。「見張りのあなたが動ければ、それでいいじゃない」なんて言われちゃつたら、何も言

い返せない。

相槌を打ちながら、ぼんやりと横顔を眺める。夢の話に興じるまりつペは、いつになく楽しそうだった。

「だから、本当は高校なんて行かなくてよかつたのよ。でも、パパが許してくれなかつたから」

まりつペの夢を知つてもなお、せめて高校はちゃんと卒業するように言われたらしい。まりつペがモデルになつて失敗するわけなんかないのに。

どこも一緒だ。

母には、どこでもいいから大学は出ておいたほうがいいと言われていた。だから、私はその言葉を自分が立てた目標だと思い込みながら、なんとなく高校生らしい生活を送つてきたつもりだった。なんとなく行けそうな大学を選んで、それなりに勉強して合格する。夢とか人生のことはその後で考えても遅くない。それでなんとかなるはずだった。

そんな私が、今はまりつペの隣で非行のお手伝いだなんて。

それにしても、モデルになるなら、なおさらタバコは

吸わないほうがいいんじゃないだろうか。未成年喫煙のせいでミラクルティーンを降ろされたモデルもいるらしいし。

「私に指図しないで。タバコを吸つてるモデルなんて世界にはたくさんいるわ」

まりつペはいらついた声でそう言つてから、いつもより少し長い吸い殻を灰皿にしまいこむ。普段ならもう一本という場面だけど、私が水を差してしまつたせいで小休止となつた。

怒つているかもしれない、という私の微妙な意識のせいで、この沈黙が苦しく感じられる。たぶんまりつペはもう気にしていないし、ぐちぐち責め立てる気もないことは分かっているのに、心地いいはずの静かな空気が逆に私を締め付けていた。

「ご、ごめん……うん。赤沢さんなら、きっとなれるよ」「うん、ありがと。嬉しいわ」

まりつペは手持ち無沙汰な風に明るい水色のシガレットケースを弄ぶ。薔薇の刺繡をあしらつたおしゃれなケースだ。古着をリメイクしたボーチやミニティッシュケー

スをいくつか持っていたから、これもおそらく手作りなのだろう。

「ねえ、C子の夢は？ 教えてよ」

ちょうどタバコを一本吸い終えて、まるで次はあなたとのターンよとでもいうように私に向き直る。私の夢？ そんなの、このまま普通に高校に通つて、卒業して……それから？ それから、私は何をしたかったんだっけ？

とりあえず申し込んだ進学希望者向けの補習には、彼女と「約束」したあの無断欠席の日からもう行つていな。最初から強い目的意識もなくだらだら通つていただけだから、足を止めるのは簡単だった。三回休んだあたりで担当の数学教師に呼び出されたから、進路を迷い始めたのでしばらく行けません、と伝えて後は知らんぷり。

悪い意味でただ前に進み続けていた私にとつて、そういう嘘を吐くのは新鮮で、少し息苦しもあつた。でも、

まりつペの隣にいられるなら、もう受験さえもどうでもよかつた。この瞬間は、確かに私の意志で選び取つたのだから。

いつの間にか、私の生活はまりつペを中心に回つてい

た。自分の夢なんて考えるのを忘れてしまうくらいに。

でも、まりつペはどうだろう。みんなの視線を集める世界的なモデルになつて、颯爽とランウェイを歩く……。そんな彼女の夢の中に、きっと私はいない。私は、テレビの前で彼女の凛とした姿に見とれることしかできないだろう。まりつペに視線を送る大衆の一人として。

まりつペが高校をやめてしまわなければなんでもよかつた。あの時は、それが一番の目的だつたから。でも、タバコだつて、私たちはすぐに堂々と吸える年齢になる。そうしたら、私とまりつペの「約束」は終わつてしまふ。喫煙を言い訳にして彼女に寄り添い続けるも、必ず終わりが来てしまふ。

「私は……まりつペと一緒にいたい」

「ま、まりつペ？」

「ねえ、まりつペ。まりつペは、ずっとこうして私と一緒にいてくれるの？」

「落ち着きなさいよ。C子、痛いわ」

いつまでも一緒にいて、私を置いていかないで、私も連れていつて……と心の中で叫んでいるうちに、ざらざら。

らとしたコンクリートの床に手のひらが擦れる感覚がして、その痛みで我に返る。

「ねえC子、あなた大丈夫?」

「うあ……」

まりつペが私を見下ろしていた。一方の私は、バラン

スを崩して尻もちをついたらしい。その拍子に手が擦れたのだ。まりつペは自分の身体を抱くように立っている。じっと警戒する様子を呆けた顔で眺めているうちに、まりつペの肩を強引に掴んでいたことを思い出した。

「う、うめんね……うめん、赤沢さん。私ってば、なんてことを……」

焦りと混乱で動けない私は、へたりこんだまままりつペを見上げている。ちょうど夕日が沈む頃で、まりつペの後ろから燃えるような夕焼けの光が差していた。彼女の脚から伸びた長い影が、私の上をぐにやりと曲がって逃げていく。

「あなたの夢、訊いちゃいけなかつた?」

「ち、違うの。ただ、私、怖かつたから……」

心配そうに私の顔を覗き込む。怖かつた、という気持

ちに間違いはないけれど、きっとまりつペには伝わらないだろう。彼女との将来を悲観していた、なんて。でも、それでよかったです。まりつペの邪魔になるような思いを伝える意味はないし、結果の分かっているような告白をしたくはなかつたから。

まりつペは少し首を傾げてから「それなら、いいんだけど」と言つて、私に手を差し伸べる。そして、立ち上がりた私にタバコを差し出した。

「夢なんて、すぐ見つかるわ。一本吸つてみる? 気分がよくなるわよ」

やつぱり、まりつペには私が夢を見つけられなくて焦つてているように見えたらしい。あながち間違つてているわけではないけれど、こればかりはタバコを吸つてもどうにもならない。

まりつペのタバコは、特別なタバコなんだという。タバコ屋さんでは手に入れられない特別なタバコだから、とっても美味しいのよ、と指を揺らす。

「特別、つて?」

「特別は、特別よ。こうやって付き合つてくれてるあなた

たも、特別よ？ 特別だから、あなたにもあげるの」

私はタバコに詳しくないから、美味しいと言われてもよく分からぬ。でも、普通のお店で売つてもらえないの

だから、当然誰かから譲つてもらうことにはなるだろう。だから、特別と言つても、単に協力者がどこかから仕入れてまりつべに渡しているだけなんだろうなと思つた。

でも、協力者つて誰？

麻薬の売人というのは聞いたことがあるけれど、未成年にタバコを売り捌くのは、もつと違う存在だろう。まりつべと仲が良くて、まりつべが困った時に頼つているような、もつとプライベートな協力者——私よりも頭が良くて、頼りがいのある誰か。

革の携帯灰皿のことが頭をよぎつた。まりつべが、私が以外の誰かに頼つてる？ そんなの、嫌だ。まりつべとのさよならを覚悟しているはずなのに、私は「特別」という言葉に嫉妬していた。

彼女が気まぐれで与えてくれたこの時間のせいで、私

以外にも向けられた「特別」に、どうしようもない敵対心を抱いている。まりつべの「特別」は嬉しいけど、私だけ

の「特別」じゃない。抑えられない独占欲の自覚が、さらにおもろい。私は惨めな気持ちにしていた。

「でも……」

改めて、まりつべが差し出したタバコを見つめる。いざ吸い口を向けられると、非行をしているという現実感がどつと私に襲いかかってきた。

もちろん、彼女のタバコを見逃してあまつさえこうして今まで付き合つてきたことは、立派な非行だろう。でも、自分が本当にタバコに手を付けるところを想像すると、ドキドキして手の先が冷たくなつた。まりつべと同じ香りが身体中に巡る高揚感と、非行に手を染める興奮が一緒になつて、太ももの辺りがぞくぞくとした。

「ま、そうよね」

そうして逡巡しているうちに、まりつべは差し出したタバコを自分の口に戻してしまつた。そして、くわえたタバコに火を付ける。私はライターを持っていなかつたから。

「ほら、C子。こっち」

「ど、どうしたの、赤沢さ——ん、むつ！」

私を呼ぶ声に反応して歩み寄ると、まりっぺは私を優しく抱きとめて唇を重ねた。まりっぺの吐く息は甘くてピンク色で曖昧で、それだけでもう何も考えられなくなる。頭がストロベリーの煙で満たされていくうちに、目の前にいる彼女の表情はよく見えなくなつて、今なら殺されたつて分からぬだろう。

何秒か、何十秒かそうしていた。小さく息をしているうちにふわふわとした煙の味が薄れて、徐々に夕日に包まれた屋上の風景が戻ってくる。その光景は、目を閉じる前よりもずっと綺麗だった。光がきらきらして、まりっぺの綺麗な髪の毛を一本ずつ彩っている。ぼんやりとした光の影の境目がぐつと伸びて、私と混じり合っていくようになつた。

「ふふ、美味しい？ これなら、吸つたことにはならないわ」

「ま、まりっぺ……ねえ、もしかして、私のこと……」
もしかして、私のこと好きなの？ そんなおこがましい疑念をねじ伏せるように、まりっぺは優しく笑っていた。

「あら、ごめんなさい。電話みたい」

——と、まりっぺの携帯から、どこかで聞いたことのある洋楽の着信音が聞こえる。まりっぺはひらひらと手を振つてキスの中斷を告げると、後ろを向いて誰かと話し始めた。一瞬ちらりと盗み見た画面には、「A子」という文字が流れていた。

A子？ うちのクラスにはそんな名前はないし、まりっぺにきょうだいはないはず。昔の同級生か、それとも幼馴染？ 考えているうちに、顔から血の気が引いていくのが分かつた。目の前にかかる霧がすっかり晴れて、意識が現実に戻つてくる。

「もしもし、A？ ……うん、うん……ふふつ、なによ、それ。——」

じっと耳を澄ます。近況の報告とか、ファッショントークとか、タゴはんのこととか。まりっぺは「A子」とそんなことを話していた。

薄く聞こえる声は確かに女のものだ。それで余計に腹が立つ。携帯灰皿の男以外にも、まだ仲のいい友達がいるつてことだから。綺麗なまりっぺは、レベルの低い友達とは付き合っちゃいけないので。B子とだつてちやん

と距離を置いてるのに。どうして？

待つてよ。こんなの、まりっぺじゃない！ まりっぺはもつと孤高で気高い存在なのに。

「C、ごめんね。ちょっと用事ができちゃった」

「う、うん。また……ね」

ねえ、まりっぺ。Aって誰？ どうしてそんなに楽しそうに笑ってるの？ 私には、そんな顔したことないじゃん。まりっぺにそう詰め寄ったって、彼女の笑顔が困惑に変わつて、きっとそれだけ。もうどうしようもない。

まりっぺは私にくれたタバコの火を消して、手早く身

支度を済ませた。そして「その傷、ちゃんと手当したほうがいいわよ」と言つて私の手のひらを指差してから、足早に屋上を去つていく。

まりっぺが退学しても、私以外の学校生活は問題なく回つているようだつた。まりっぺを勝手にライバル視していたB子は喜んでいたようにも見えたし、悲しんでい

るようにも見えた。トイレでまりっぺの悪口を言うことはなくなつたけど、どちらにせよ、嫌なやつだ。

眞実はどうあれ、それからまりっぺと会うことはなくなり。ピンク色の興奮がじわじわと冷えていく。春めいた凍えるような夕暮れの中で、私の青春は終わりを告げた。

まりっぺが退学した前後のこととは、よく覚えていない。おそらく、私にとっては突然のことだった。新学期になるまでその事実を知らなかつたのだから。結局、最後までまりっぺから別れが告げられることもなかつた。

先生は家庭の都合と言つていた。それは本当のことかもれないし、誰かが——私はその時B子を疑つたけど——まりっぺの「非行」について密告したのかもしれない。ただ、まりっぺの秘密を知つてるのは私だけだつたはずだから、そういう窃盗じみた侵害を信じたくはないかった。

まりっぺが退学しても、私以外の学校生活は問題なく回つているようだつた。まりっぺを勝手にライバル視していたB子は喜んでいたようにも見えたし、悲しんでいるようにも見えた。トイレでまりっぺの悪口を言うことはなくなつたけど、どちらにせよ、嫌なやつだ。

眞実はどうあれ、それからまりっぺと会うことはなくなり。連絡先は知つていたけど、先延ばしにしていたら切り出しにくくなつて、そのまま。まりっぺが私を疑つていたらどうしようと考えているうちに、昔のトーケ履

歴を見るのさえ嫌になつた。

まりっぺのプロフィールのアイコンが七回変わつた。今
まりっぺが何をしているのかは、もう分からない。

でも、一回だけまりっぺが口移しで与えてくれたあの
味を、まだ忘れられずにいる。

甘い煙に誘われて 2

片桐天音 (@amane_katagiri)

nickname 2

で誰かの生活とぶつかってしまうような狭苦しい気分になる。

まりっぺのことは、もう忘れたつもりでいた。突然私の前から姿を消した彼女のことを、いつまでも追い続けるわけにはいかなかつたから。

あのとき、まりっぺはどうして私にさよならを言わなかつたんだろう。私のことを嫌いになつたんだろうか。

まりっぺは、最後に私をCと呼んでくれた。私が赤沢さんをまりっぺと呼ぶように、私をCと呼んでくれた。だから、半ば強引に参加させられたこの同窓会で、後ろから懐かしいあの声で「C」と呼ばれたとき、私の心は確かに四年前に戻つていた。

「あら、C、久しぶりね」

「……まりっぺ。どうしてここに？」

secret 2

まりっぺの部屋は、駅から十分ほどのアパートの三階にあつた。振り向くと、細い道を挟んで背の低い一戸建てやアパートがひしめき合つていて、一步踏み込むだけ

もう辺りはすっかり暗くなつていたけど、歩いていてもそれ違うのは残業帰りのサラリーマンくらいしかいない。窓から漏れる黄色い光と、睨むように冷たく光る街灯が、疲れた顔を上からぼんやりと照らしていた。

この辺りはあんまり治安が良くないと聞いていたけど、今のところは閑静な住宅街に見える。

「そう？ 住んでみれば、そんなに悪くないわよ。狭いのは慣れてるし」

「でも、暗くて危ないよ」

街灯はそれなりに整備されているとはい、建物と建物の間を縫うような細い道はやっぱり見通しが悪い。この川沿いの住宅街にたどり着くまで何度も路地を通り抜けてきたけど、まりっぺみたいな若くて綺麗な女の子が通り抜けるには、少々おぼつかない箇所もあつた。

「あら、普段はちゃんと暗い道を避けて帰つてるわよ。でも今日は、特別だから」「特別？」

「私のこと、守ってくれるんでしょう？　あの約束、もうおしまいなの？」

えつ、と思わず聞き返してしまった。あの約束、と言われて思い出すのは高校二年のことだ。あの時もまりつペは、確かに「特別」と言っていた。まるで魔法の呪文みたいに。

まりつペが退学してから、私は彼女がくれた「特別」を忘れようとしていたけれど、どこかで同じくらい彼女に期待していた。私とまりつペを結んでいた灰色の糸はもう切れてしまつたはずなのに、彼女の呪文は私をずっと縛り付けている。もう一度まりつペの「特別」になれるかもしれないと期待するだけで、もうそのことしか考えられなくなつていた。

「……そんなこと、ないけど」

だから今も、まりつペがこうして遠い日の約束をちらつかせるだけで、私はそこから目が離せなくなつてしまふ。

彼女と過ごした甘い日々がありありと思い出されて、何も言えなくなつてしまうのだ。私が本当に彼女を守り抜けれるかどうかには関係なく、ただ約束だけがそこにあった。

でも、彼女の特別は私にはよく分からぬ。私だけの特別じゃなきや、何の意味もなかつたから。私にくれた特別と、誰かにあげた特別が同じなら、それは特別なんかじやなかつた。

「ねえ、ちょっと」と

と、私が下を向いて黙つたままでいると、突然まりつペが私の横から身体を押し込んでくる。ツインテールがふわりと私の顔をなぞつて、ヘアミストに包まれたまりつペの甘い香りが鼻をくすぐつた。その優しい不意打ちに、私は思わず後ろへ一歩、二歩……そのよろめくような動きが滑稽に見えたらしく、後ろを向いたまりつペが小さく笑つた。ほのかに光が漏れる。

「ま、まりつペ、どうしたの？」

「どうしたの、って……そこに立つてたら、ドアが開けられないわ」

まりつペは部屋の鍵を開けようとしていたらしい。いや、帰ってきたのだから当たり前だ。まりつペが退屈そうにキーホルダーをもてあそんでいる横で、私は昔のことに夢中になつてただ突つ立つていたらしい。慌ててま

りつペの横に収まるように滑り込むと、程なくして重たい音と共にドアが開いた。

「少し散らかってるけど、適当にくつろいでちょうどいい」靴を脱ぐ。アパートの古びた外見とは裏腹に、1Kの小さな部屋はまりつペらしさで埋め尽くされていた。

フローリングの上には左からベッド、ソファ、ガラステーブル、そして棚とその上に小さなテレビ。部屋の隅には大きな白いクローゼットと姿見が置かれていて、中にたくさんのドレスが入っていることが窺える。奥にはベランダに続く掃き出し窓があり、今はそこにジャガード調の柄がきらめくピンクの遮光カーテンが引かれていた。棚やベッドに置かれたたくさんのぬいぐるみのせいで、散らかったような印象も受けるけど、淡い色で統一された室内はまさにまりつペのお城という感じだ。そんなお姫様の部屋の雰囲気を仕上げるように、ローズアロマがほんのり香っている。

でも、その優しいフローラルの香りの後ろに、隠しきれないタバコの匂いがかすかに残っているのを見逃さなかつた。床に、ソファに、壁紙に、かつてまりつペが

くゆらせていたような甘い匂いのものじやなくて、ツンとした嫌な刺激臭を感じる。よく見ると、煙が染みているせいか、淡い花柄の壁紙の端が少しくすんで生活感を残していた。

別に、まりつペがどんなタバコを吸つていいようと私は気にしない。むしろ、新しいまりつペの匂いを歓迎してしまうだろう。問題は、それが本当に「まりつペの匂い」なのかということだ。まりつペに感じていた男の影の正体を、私は結局確かめられずにいたから。

そして、まりつペについてもう一つ気になることがあつた。それは、彼女の舌にはまつたピアスのことだ。食事の時から気になっていたけど、何度もその瞬間を見ているうちに確信した。笑うたびにちらりと覗く銀色の丸みは、かつてのまりつペからは見つけられない明らかに異質な存在だった。ほのかに残るタバコの匂いが妙に頭に染み付いて、その穴さえも誰かが作った傷のように思えてくる。まりつペに刻まれている誰かの跡が、可愛らしく飾られた部屋や身体の中に隠れているのが分かる。私がまりつペの恋人だったなら、口をこじ開けてでも確かめること

ができただろう。でも、今の私には、それが本当にピアス

なのかを尋ねることすらできなかつた。その傷が誰かに
隸属している証だとしたら、私はもう立ち直れないだろ
うから。

「ソファ、座つて。飲み物、コーディアルソーダでいい？」

「う、うん」

赤いチェックのトレイには、緑がかつた琥珀色の涼や
かなジュースで満たされたコップが二つ。からりと氷の音
をさせながら、まりつペは順番にコップを並べていつた。
準備を終えたまりつペが私の隣に座つて、のどを鳴ら
してソーダを半分ほど流し込む。私もそれにつられてコッ
プに口を付けてみると、優しい花の香りと共にほのかな
甘酸っぱさが口いっぱいに広がつた。

*

デルを目指しているらしい。

一方の私は、適当な大学に進んで人生を先送りにして
いるうちに、夢も人生も考えられないまま社会に出なけ
ればならなくなつてしまつた。高校を出なくとも夢を叶
えられる人はいるなんて、あの頃の私に言つたら信じる
だらうか。大学に行つても夢を見つけられない人がいる
なんて、あの頃の私に言つたら信じるだらうか。

まりつペは、なぜかB子の話ばかり聞きたがつた。私
はB子のことなんてよく知らなかつたし、思い出すのも
嫌だつたけど、まりつペにとつては懐かしいクラスメー
トの一人でしかないのだらうか。あんな女のこと、どう
して。

しかし、自分が勝手にライバル視していたまりつペを
同窓会に呼びつけて、B子は何をしたかたんだらう。前
からB子は嫌なやつだとは思つていたけど、まさか大人
になつてまでそんな子供みたいな意地悪をするとは思わ
なかつた。

それから、私たちは色々なことを話した。高校のこと、
大学のこと、専門学校のこと。新人モデルとして頑張つて
いること、就活がなかなか上手くいっていないこと。高
校を去つたまりつペは、東京で専門学校に通いながらモ
ー

んな夜遅くまで残業か、と思いながら声のトーンを落として通り過ぎるのを待っていると、まりっぺは逆にその足音に反応するように立ち上がった。

「あら、来たみたい。少し待つてて」

そう言つて、まりっぺがチャイムも鳴らないうちに玄関に向かう。しかし、こんな時間に来るのは宅配便でも訪問販売でもない。私が「誰か来るの?」と尋ねると、まりっぺは振り向いてこう答えた。

「A子よ。後で紹介するわ」

*

ずかすかと上がり込んできた女のことを、まりっぺは確かに「A子」と呼んだ。

「よつ、タバコ吸いに来たよ。……あれ? 誰、それ」

「友達よ、友達。来るなら先に言つてよね」

A子は喫煙所にでも来たような口ぶりで、まりっぺの部屋に上がり込んだ。手に持っているのはフィルムに包まれた新品のタバコだろう。深紅のパッケージの表面にはホログラムが貼られていて、動くたびに蛍光灯を反射

して安っぽい黄色のきらめきを放つている。

A子。その名前には聞き覚えがあつた。いや、忘れるわけがない。まりっぺと私の大事な時間を邪魔したA子。私からまりっぺを奪つていったA子。私から「特別」を奪つていったA子。

四年前のあの瞬間が、今日の前にまた現れようとしていた。

本当なら、まりっぺにA子との関係をすぐにでも問い合わせたかったけど、今はまだその時じゃない。A子だって、思いがけない先客の私を見て何か思うところがあるだろう。もししかしたら、向こうから何か仕掛けてくるかもしれないし。

A子が靴を脱ぎながら、ピンクのスケートボードをドアに立てかける。まさか、ここまでスケボーで來たんだろうか。ロングの茶色いくせ毛を翻し、デニムと大きめのブルゾンで狭い道を駆け抜けるA子は、いかにもストリート系という感じがする。

やつぱり、まりっぺにはそんな子似合わない。

「ふーん。でも、マリーに友達なんていたつけ?」

A子の気だるげな視線が私に向く。品定めするようにゆっくりと私をなぞるその目は、敵とも味方ともつかない不思議な雰囲気を放っていた。

「友達くらいいるわよ。C子、ほら、高校の友達」

「可愛いじやん」

「ええ、行つたわ。悪い？」

「別に悪くはないけどさ。どうせ、真面目ちやんたちとは話が合わなかつたでしょ？」

A子が壁に寄り掛かって、まりつペにもゆっくりと舐めるような視線を送った。知らない私だからあんな視線を向けているのかと思ったけど、A子にはそもそも人をじろじろと見る癖があるらしい。悪い癖だなと思う。

同窓会の話は既に聞いていたようで、私のこともそこで会つた同級生だとすぐに理解したらしい。それにしても、「眞面目ちやんたち」だなんて、随分知つたような口ぶりだ。まりつペは、高校時代のことをA子にどう話したんだろうか。私のことや、タバコのこと……それに、B子のこととか。

「そんなことないわよ。Cにも会えたし」「……あ、そ」

A子は短くそう答えると、もう話すことではないとでもいうように冷蔵庫の中を物色し始めた。しばらくすると酒がない、つまりがないと騒ぐA子の声がキッチンの奥から飛び出し、まりつペもそれに応酬してごちゃごちゃとした口論を二、三繰り返す。

「あのね、そんなに欲しいなら、勝手にコンビニで買ってきなさいよ！」

「買う買う。途中にコンビニがあつたらね」

それからまりつペは、順番に私とA子の紹介を始めた。私のことは高校時代の友達だと言つていたけど、タバコの話はしていなかつた。一緒に帰るくらいの友達とか、なんとか。もしかして、A子はタバコのことを知らないんだろうか。そうだとしたら、A子はどうしてまりつペが高校を辞めたと思っているんだろう。

A子。青山A子は新宿で働くフリーターだという。この近くに住んでいるらしい。たまに来るのよ、とまりつペは迷惑そうに言つていた。わざわざタバコを吸いにく

るだけの仲なんて、まりっぺにも妙な友人がいるものだ。

「二人とも、なんだか気が合いそうね」

まりっぺは私とA子を交互に眺めながら、そう言つて少し笑つた。私には、どうにもそれは思えなかつたけど。少なくとも、マリーだなんてダサいあだ名を使う女と一緒ににはされたくなかった。

*

自己紹介もそこそこに、まりっぺは「着替えてくるわ」と告げてバスルームに消えていった。残されたのは、まりっぺの身体を濡らすしつとりとしたシャワーの音と、互いの名前くらいしか知らない他人同然の一人だけだ。

「ソファ、座りますか？」

「あー、別にいいよ。床の方が落ち着くし」

ガラステーブルに頬杖をつくA子は、ラグの端にあぐらをかいて私に向かい合うように座っている。左手で画面をスクロールさせながらぼんやりとした視線でスマートフォンを眺めるその姿は、なぜか前に見たことがあるような気がした。

沈黙が流れる。テレビを点けておけばよかった。
A子は私に興味がないらしい。でも、私はA子のことでもっと知る必要があるのだ。A子にとつてはSNSでもチェックしていれば過ぎ去るような暇な時間かもしれないけど、私にとつては彼女のことを見定めるための重要な時間だった。

手持ち無沙汰そうにもてあそぶタバコの箱が、いちいち光を反射してきらめいている。しばらくすると、A子はスマートフォンを捨てるよう床に置き、タバコのフィルムに手を掛けた。

ぱちぱちと爪でフィルムを擦る音を響かせているところを見ると、どうやら開封テープの加工が甘かつたらしい。A子は何度か包装をぐるりと見回した後、私の名前を呼んで枕元のペン立てを指差した。

「開かねーな。C子、そこにかみそり置いてない？」

「あ、はい……これですかね」

ベン立てにかみそりがあるのか、と思ひながら赤紫の薄い柄を引き出すと、乳白色のカバーに包まれた刃が現れる。A子は短く「ん」と答えると、受け取ったかみそり

のカバーを外し、慣れた手つきでフィルムを切り取った。

A子はかみそりにカバーを戻し、そのままテーブルに置こうとする。すさかず私が「よかつたら戻しますよ」と呼びかけると、A子はそれに応えて柄を握ったまま私はかみそりを差し出した。その不躊躇な刃を受け取りながら、視線を上に向けたA子と目が合うタイミングを狙つて、私は本題を切り出す。

「あの……青山さんって、まりっぺの友達なんですか？」
「マリーの友達？ それ、どういう意味？」

質問に食いついた。フィルムを剥がす手が止まる。

私を見上げるA子の目は、突然の質問を受けて少しづつ怪訝な目つきに変わつていった。一瞬、シャワーの音が止まつて、二人の間の沈黙がぐつと強くなる。

確かに、A子にとつては意味の分からぬ質問だろう。
お前は友達なのか、なんて。でも私は、四年前のまりっぺが電話口で見せたあの笑顔の正体を明らかにしたかった。

四年前も、そして今もまりっぺの隣にいるこの不良じみた女が、どうして「特別」なのかを確かめたかった。
「だから、まりっぺはどういう関係なんですか？」ま

りっぺとは、いつ、どこで知り合つたんですか？」

「なにそれ。取り調べかなにか？ そんなに気になるなら、マリーに訊けばいいじゃん」「はぐらかさないでくださいよ。言えないような関係なんですか？」

私の煽るような問いかけに、A子は眉をびくりと動かして応えた。

「はあ？ そんなわけないじゃん。夜中にいきなり尋ねても怒られないくらいの関係だよ。それ以上でも、それ以下でもない」

流石に私の追及がしつこいと感じたらしく、語調が少しずつ荒くなる。意図の見えない質問に苛立つているのが分かった。それからA子は、お前の好きにはさせないとでも言うように剥がれかけたフィルムをぐしゃぐしゃに破り捨て、ひつたくるようにタバコを一本引っ張り出した。

威嚇するような荒い仕草に飲まれそうになるけれど、ここで引き下がるわけにはいかない。
「で、なんなのその質問？ 意味分かんないんだけど」

「あの、友達なら友達って言つてくださいよ。もう一回訊きます。まりっぺとは、どういう関係なんですか？」

全く同じ質問に、A子がとうとう大きな溜息を吐く。苛立つた彼女の表情が徐々に怒りを帯びていった。射るような目つきは荒っぽくて、纖細さの欠片も感じられなかつたけど、その力強さはまりっぺと少しだけ似ていた。

「だから、なんだつていいじゃん。友達かどうかがそんなに気になるのかよ」

「気になりますよ。だつて、私は——」

「……じゃあさ、恋人だつたらどうすんの？」

恋人？ 私の言葉を遮るように、A子がぽつりと呟いた。まるで取り留めのない雑談のように投げかけられた言葉が、私の心に大きな波紋を広げていく。

A子はすこぶる退屈だとでも言うように、指に持ったタバコをテーブルに放り投げて背伸びするように身体をのけぞらせた。そのゆつたりとした動きを見ていると、余裕がないのは私だけのように思えてくる。

つまり、まるでこの女が本当にまりっぺの恋人で、その事実を知らない私だけが一人で大騒ぎしているような……

「そんなわけないのに。そんな——
「——こ、恋人なんて、そんなわけない！」

駆け巡る疑惑に耐えきれずに、私は思わず立ち上がりつて。彼女の罵にハマつたのだと氣付いた時にはもう遅い。私を見上げて鼻で笑うA子を見て、私は負けた、と思つた。もう目の前には、冷静なA子と感情的な私が向き合う滑稽な構図ができあがつていた。

「なんでだよ。C子だつて、マリーが好きでここに来たんだろ？ 私たちが付き合つてたつておかしくないじゃん」まるで私の気持ちを知つていてるかのような物言いだ。そやつて、言い当てるふりをして動搖を誘つているのは分かっていたけど、一度崩れた態勢を整えるのは難しい。私の中の疑心暗鬼じみた想像が広がつて、少しずつA子のペースに巻き込まれていて分かつた。

「おかしいですよ！ だつて、そんなの……付き合つてるんですか？ 好き、なんですか？ まりっぺのこと」「好きだよ。好きだけど、だからなんなの？」

付き合つてるのか。そんなことを訊いたつて、答えてくれるわけがないのは分かつていた。

友達だとか付き合ってないとか、A子はまりつペとの関係を言い切るつもりはないらしい。なぜかは分からないけど、A子はそうやって何も知らない私をもてあそんでいるようにも思える。本当に性格の悪いやつだ。

しかし、私にもまた切り札があった。

「でも……無理ですよ」

「無理？　だから、なんでだよ？」

「だって、まりつペは……」

だって、まりつペは高校時代に男と付き合っていたんだから。タバコも灰皿も与えて、まりつペに協力していたやつがいる。いや、今も付き合っているのかもしれない。まりつペはたぶんその男と仲が良くて、だから、まりつペはたぶん女人の人とは——私たちとは——付き合わない。はつきりそう言つてしまつたら、余裕そうなA子も流石にショックを受けるだろう。だって、彼女は携帯灰皿のことを知らないはずだから。敵ながら心配になつたけど、ここまで来たらもう言うしかない。

「だってまりつペは、高校時代に男の人と付き合つてたんですから。女人の人にそういう興味はないはずです」

私は落ち着いて、動搖しているのをこれ以上悟られないうようにそう告げた。これでもう、A子の余裕は崩せたはずだ。

*

「高校時代に、男……？　ああ、もしかして……これのこと？」

「えつ……そ、それは……」

A子が掲げたのは、まりつペが持つていたのと同じ形の、茶色い革の携帯灰皿だつた。素材や縫製から見ても、同じブランドの色違いだろう。面食らつた表情を隠せない私に、A子はさらに寛み掛けた。

「びっくりした？　確かにマリーはこれの黒を持つてゐるけどさ、あれは私があげたんだよ」

息が詰まる。声が上手く出なかつた。まるで追い詰められた真犯人みたいに。

でも、既製品の灰皿なんて同じものがいくらでも手に入るんだから、これがすぐに決定的な証拠になるわけじや

ない。偶然だつてありえる……自分の中でそんな言い訳をぐるぐると巡らせていたせいで、私の「切り札」がもはや切り札でないことに気付くまで、少し時間がかかった。「マリーがダサい携帯灰皿を持つてるから、彼氏がいるつて思つたの？ 残念だけど、あいつにタバコを覚えさせたのは私、その携帯灰皿の彼氏は、私なんだよ」

けられると楽しそうに笑うA子。それは勝利宣言だった。随分と無骨な携帯灰皿だから、センスのない男がプレゼントしたものとばかり思つていたけど、まさかセンスのない女だつたなんて！

「そつか、タバコの見張り役つて、C子のことだつたのか。マリーが吸つてたタバコつて、これだろ？」

A子がストロベリーの箱からもう一本引き出した。火を着けて、吸つて、息を吐く。テーブルからソファに広がつていくストロベリーの香りは、確かにまりつペが私にくれたあの香りだ。私の中にじわじわと染み込む煙の味を感じながら、まりつペが「特別」なタバコだと言つていたのを思い出していた。

遠い目をしたまりつペが、上を向いてふわりと煙を吐き出す。あの光景が、眼前によみがえつてくる気がした。『あつはは、まつず！ やつぱ甘いのは不味いわ。笑えてくるほど不味い』

と、まるで目の前にまりつペがいるようなその不思議な感覚は、A子の下品な笑い声で簡単に破られる。でもたまに吸いたくなるんだよね、なんて機嫌よさそうに笑いかけるA子は、そんな私の落胆を察するつもりもない。

りつペの「非行」に付き合つていた頃に吸つっていたものだ。まりつペはこの箱から何本か取り上げて、薔薇の刺繡を縫い付けた水色のケースに入れていたのだ。「ストロベリーの香りがする輸入タバコだよ。ウチで特別に仕入れてる」

葉の間にほのかに香る甘酸っぱい香り。普通のタバコよりもきゅつと細く締まつた芯。確かにこれは、私がま

部屋を何度もまりつペの香りでいっぱいにして、私の自傷じみた妄想だけをいたずらに煽つていつた。

A子の煙に染められたまりつペ。まりつペの服が、肌が、目が、少しづつくすんでいく想像が頭を離れない。

「も、もしかして——」

「ちょっと、A！ 部屋では吸わないでって言つてるでしょ……って、なんでそれ吸つてるのよ」

もしかして、まりつペの舌ピアスもA子が開けたの？と尋ねるより先に、頭にタオルを巻いたバスローブ姿のまりつペが私たちの会話を遮つた。

お風呂上がりの上気した肌に、むわりとした熱気がまとわりついて部屋に入つてくる。しつとりとしたシャンプーの香りが、ストロベリーの煙と混ざりあつて、とろけるような甘酸っぱい香りに変わつた。

「あー、ごめんごめん。C子が気になるって言うからさ」

「そ。なら、まあいいけど。部屋ではやめてよね」

A子の適当な言い訳に、まりつペはいつたんその怒りを収めてみせた。そして、A子に聞こえよがしの小声で私は告げる。

「C、ごめんね。部屋がタバコ臭いの、この子のせいだから」

「そうだろうな、と思う。男の影の正体は、もうA子なのだと分かってしまったのだから。壁紙の隅に染み込んだ、消しても消しても消えないA子の匂いを、まりつペはどう思つてゐるんだろう。私の前ではこうして気にするそぶりを見せるけど、もしかしたら、本当は。

それから、まりつペはいつたん収めた怒りをまた引き出すように、A子に向き直つた。

「ほらほら、外で吸つてよね！ ここ、私の部屋なんだから」

rose 1

A子は不満げにぶつぶつ言いながらも、テーブルに放つてあった自分のタバコを取り上げながら立ち上がる。まりつペの言うことはちゃんと聞くんだな、と思いながら、私もそれに倣つて外に向かうことにした。まだ訊くことがあつたから。

ベランダへ続く窓を開けると、部屋の中にこもった湿った雰囲気が冷たい空氣と入れ変わるようカーテンの外に出ていく。五月とはいえ、まだ夜は冷える。私の足元を冷やかな風が駆け抜けて、口論で熱くなつた頭が少しずつ落ち着いていくのを感じていた。

と同時に、まりつべに感じていた男の影が、私が彼氏だと思っていたやつが、本当はA子だという事実が少しずつ私の中に広がっていく。苦いような、酸っぱいようなそ

の感覚は、タバコの煙のように私に染み付いて離れない。

「早く閉めてよね。風邪引いちやうから」

「はいはい……あ、C子、電気消してくれよ」

A子がベランダに一步踏み入れた姿勢のままで振り向いた。その馴れ馴れしい指図にムッとしたが、まりつべがいる手前で意地悪なことも言えまい。作戦とはいさつきかみそりを取つてやつたしな、と思いながら、テープルの上のリモコンを何度も押した。

部屋の電気が消えて、カーテンの隙間から外の仄かな光が覗く。カーテンを引っ張つてくるように窓を抜けると同時に、都会のささやかな夜空の自然光と、向かい

合う窓から漏れる少しばかりの人工光が私を迎えた。

私がベランダに出たのを確かめると、A子は後ろ手でからからと窓を閉める。そして、室外機の上の暗がりから何かを取り上げて、バランス良く手すりに置いた。なんだろうと思つて顔を近づけると、くすんだ灰の匂いがする。「部屋に灰皿を置くのはダサいんだってさ。だから、部屋ではこれ使うの」

A子は「これ」と言つて、さっきの茶色の携帯灰皿を星空に重ねるように見せつけてから、そのままポケットにしまいこんだ。

準備が済んだA子は窓に寄りかかると、また赤い蛍を光らせて一服し始めた。すぐにそこら中がきついタバコの匂いで満たされていく。弱々しい星の光が煙に隠され、灰色の空だけが残つた。まりつべの湯上がりの甘酸っぱい匂いも、少しずつ記憶の奥に追いやられていくのが分かる。

私の中のまりつべが、少しずつ壊れていく。

だつて、まりつべは優しすぎるのだ。私だつたら、こんな鼻の壊れた友人は作らないだろうから。身の程知らず

に上から目線で絡んでくるやつだつて、真っ先に絶交するだらうから。

「C子は、タバコ吸わないの?」

「はい、吸わないですね。匂いが気になるので」

そう皮肉で返したけど、A子は「別に気にする必要ないでなくない?」と、伝わっているのか無視しているのか分からぬよいうな返事で私をいなした。

「じゃあ、これ。やるよ」

A子が取り出したのは、紫色をした丸い鉛筆のような細長い筒だつた。手に取ると少し重たくて、表面のさらさらとしたラベル越しに金属の冷たい感じが伝わつてくる。これは何かと尋ねると、A子は電子タバコだと言つた。「えつと、だから私、タバコはちょっと……」

「何も入つてないって。日本のだから。風味だけ」

A子はほら、と言つてその「電子タバコ」を目の前で吸つてみせた。A子が吸うのに合わせて先端が赤く光つて、ふつと消える。

今度はA子が吐くのに合わせて甘つたるい香りが駆け抜けて、それから元のタバコの匂いで茶色く塗りつぶさ

れていく。喫煙者が吸つてみせたつて「何に入つてない」証明にはならないだらうけど、少なくとも今すぐ倒れるような危険な成分は入つていないようだ。

「これ、どう吸うんですか?」

「どう、つて……吸うの、穴から。口で」

暗くて分からなかつたけど、よく見ると十五センチほどの筒の片方に小さな穴が開いている。これが吸い口らしい。妙な感じだ。

ふーん、と思ひながら吸い口をくわえて軽く息を吸い込むと、なるほど、バラの合成香料のような安っぽい甘さが口の中に広がつていく。少し煙たけれど、A子の吸うタバコのような刺激臭はない。さらに吸うと、先端がゆらゆらと赤く光つているのが分かつた。

もやもやとした感じが気持ちいい。なるほど、タバコみたいに光るのかと思いながら先端を見つめているうちに、何だか気分が良くなつてくる。

さらに強く肺まで吸い込むうちに、いきなり何かがパチッと弾ける音がした。

「ぐ、ぐはっ……げほっ！　げほ、げほっ……び、びつく

りした……」

「慌てて吸うなって。中学生かよ」

驚いた拍子に煙が変なところに入り込んで、次の瞬間

私は大きく咳き込んでいた。あんまり強く吸うと、中で

蒸気が弾けるのだという。そんなの聞いてない。

「でも、いい匂いだろ？ タバコを吸わないお子様にぴつ

たりだよ」

「う、うん……」

急に咳き込んだのが恥ずかしくて、何だか気が抜けてしまった。私は電子タバコも上手に吸えないのか、と落胆とも諦めともつかない感情がぼんやりと頭を支配する。

A子が私に皮肉を言ったのは分かっていたけど、なぜか

やり返す気にはなれなかつた。

優しく煙を吸い込むと、また甘つたるい香りが抜けていく。その感覚を確かめるように、私は何度も息を吸つた。

舌ピアスのことは、訊かなくてももうなんとなく分かつていて。まりっぺにタバコを教えたのもA子、ピアスを開けたのもきっとA子なのだ。まりっぺはA子のもので、私が入り込むだけの隙間はもうなかつたのだ。

私はまりっぺの隣にいる間、まりっぺに何かを残せただろうか。私がいなくなつてからもずっと残るような、何かを。

「ねえ、A子」

「ん？ どうした、急に」

「まりっぺのこと、よろしくお願ひね」

まるで死期を悟つたかのようなせりふを聞いて、遠く夜空を見つめながらタバコをぶかしていたA子が顔をこちらに向ける。しかし、別に私の余命を気にしているわけでもなく、ちらりと私の顔を見るだけで眉一つ動かさない。

「ふーん、そういう目もできるんだ」

友達を売るような真面目ちゃんのくせにさ。A子はそう言つて、ベランダから去つていつた。

*

A子はひとしきりタバコを吸つて満足したらしく、私がベランダから戻ってきた時にはもう部屋からいなくなつていた。

「おかえりなさい、C」

「あ……う、うん。ただいま」

まりっぺはもう、バスローブからレースをあしらった

柔らかそうなボアのパジャマに着替え終わっていた。姿

見の前で全身がピンク色のもじもじで包まれた自分の姿を確認しながら、時折裾をくいと少し引っ張つてフリルの形を整えている。

可愛いなと思うと同時に、まりっぺはもうA子のものなのか、とぼんやり考えていた。

「A、あなたに挨拶もしないまま帰っちゃつたわ。あら、それ……」

そう言いながら、まりっぺが私の右手を指差す。その

先に持っているのは、さつきA子がくれたローズフレーバーの電子タバコだ。返そうと思っていたのに、まるで嵐のようなやつだ。

まりっぺは一瞬怪訝な表情をしてから、すぐに嬉しそうに笑つた。

「Aつたら、よっぽどCのことが気に入ったのね」

A子が私のことを気に入った？ そんなふうには見え

なかつたけど。少なくとも私は仲良くするつもりはなかつたし、A子だってそれには気付いていただろうに。

そんなことを考えながらソファに掛けると、まりっぺも私の隣に座つた。

「じゃあ今日は、私もローズのタバコにしようかしら」

そう言うと、まりっぺは枕元から細長いピンクの箱を取り出した。そして、濃いピンク色の紙で巻かれたおしゃれなタバコを引き出す。ホログラムが巻かれた箱のきらめきはA子のと似ているけど、心なしかより上品な輝きに見える。

部屋で吸つてもいいのと尋ねると、今日は特別よ、と言つて笑つた。

「A、たまに来るのよ。寂しいのよね、きっと」

まりっぺの口元からふわり、と濃厚なローズの香りが漂う。でもその後ろには、確かにタバコの香りが潜んでいた。その甘い香りとは正反対のツンとした刺激を意識すると、嫌でもA子のことを思い出してしまった。

いい匂いのはずなのに、その後ろに隠れる影ばかりが気になつていた。

執着しても、慘めになるだけだから。

「ねえ、C。私が女の子と付き合つてて、どう思つた？」
その言葉をすぐに理解できたのは、その現実に薄々勘付いていたからだろう。きゅっと胸が締め付けられるような冷やかな悲しみと一緒に、やっぱりそうなのか、という諦めが広がっていく。覚悟はできていたはずだけど、まりっぺの口から直接聞くとやっぱり苦しい。

「ど、どう……つて？」

「だって、私のこと好きなんでしょう？」

でも、次の言葉は予想もつかないものだった。まりっぺは「違う？」と尋ねながら、私の顔を覗き込む。

私がまりっぺのことを好き？ まりっぺもA子も、ど

うしてそんなことをはつきり言うんだろう。私の気持ちを知ったような口ぶりで、私の前で、まるで私の代わりみたいに。

「ねえ、C。泣かないでよ」

「だって……だってまりっぺは！ タバコだって、ピアスだって、全部A子の言いなりなんでしょう？ 私はまりっぺのこと、強くて可愛い女の子だと思つてたのに……そんなの、そんなの……ひどすぎるよ……」

「あら、ピアスってこれのこと？」

私は彼女に背を向けて、絞り出すようにそう告げた。好きじゃない。まりっぺのことなんか、好きじゃない。これはもう、本当の気持ちだった。だって、A子に染まつたりっぺなんて、もう。

泣きじやくる私を撫でる手が止まって、まりっぺがペロリと舌を出す。その先には、確かに丸いピアスがはまっていた。やっぱり、そうだ。存在感を強烈に主張するその

A子。私の前に現れて、まりっぺをさらつていったA子。まりっぺを好きなだけ汚して、私に見せつけるA子。結局まりっぺも、まるでバカな女と同じように、あんな不良みたいなやつが好きなのか。私じゃ何が足りなくて、私じゃ何がいけなかつたんだろう。

傷を見て、勝手に涙があふれてくる。

私は声に詰まつて何も言えずにただ頷くと、ところが
まりつペは、不満げな顔で私に向き直つた。

「何言つてるの？ 違うわよ、私は誰かに身体を傷つけ
させたりしないわ」

「で、でも青山さんは……」

「私のことは私が決めるつて言つたでしょ？ むしろA
は反対してたわよ。あの子、すごく勝手なんだから」

まりつペのピアスは、A子が開けたものじゃない？ ジヤ
あ、まりつペが自分で決めたの？ そうだとしたら、私は
大きな勘違いをしていたらしい。舌にはまつた丸い銀色
が急に美しい輝きに思えてきて、私はその口元から目が
離せなくなつていた。

「だってあの子、太ももにタトゥーがあるのよ？ だつ
たらピアスくらい、別にいいじやない。温泉だつて入れ
るんだし。そう思わない？ 舌が痛いつて言うけど、そん
なの別に——」

「ま、待つてよまりつペ！ ジヤあ、そのピアスは自分で
開けたつてこと？」

A子の不満をつらつらと並べるまりつペの言葉を遮る
と、彼女はきょとんとした顔で私を見つめる。

「だから、そう言つてるじやない。私は誰のものにもな
らないわ。Aのことは好きだけど……C子、あなたのこ
とだつて、好きだもの」

「ま、まりつペ……やめてよ、そんなの……」

嬉しいはずの告白に、私は何故か拒否感を覚えていた。

私はもうまりつペを諦めると決めていたはずなのに、ま
りつペが私に希望という毒を注入していく。私は誰のも
のにもならない。あなたが好き。そう言つてのけるまりつ
ペの意志の強い瞳が、また私の心を捉えて離さなくなる。
「だって、まりつペはA子と付き合つて、だから私は
もうまりつペを諦めるしかないんだよ？」

「でも私、Cのことが好きだわ。Aのことも、Cのことも」
まりつペとの別れを決めたはずなのに、彼女に好き、と
言われるたびに顔が熱くなるのを止められない。それに、
いつの間にかローズの甘ったるい香りばかりが私の鼻を
くすぐついていた。

A子のタバコ。A子がまりつペを汚したタバコ。ツン

として臭いはずなのに、もう私はその刺激を嗅ぎ分けることができなくなっていた。少しずつまたあの「特別」への渴望が、私の中にむくむくと頭をもたげているのが分かった。

「やめて、やめてよ！　まりっぺ……なんで、諦めさせてくれないの……おかしいよ、こんなの……」

「ねえ、C？　私のこと、ずっと好きでいてね」

微笑むまりっぺと目が合う。

私はまりっぺに恐怖していた。いや、正確には、私自身に恐怖していた。彼女を求めるのを止められないこの感覚が、もがいたつてもう逃げられないと諦めかけているこの感覚が、そしてこの恐怖さえも、まりっぺの前でなら心地よく感じてしまうこの感覚が、怖かった。

「言つてよ。ねえ、まりっぺ！　A子にピアスを開けろって言われたって、言つて、言つてよ……ねえ……」

めちゃくちやなことを言つてているのは分かっていた。でもまりっぺは、すがりついて泣きじやくる私を引き剥がすでもなく、抱きしめてキスをしてくれるわけでもない。ただ、そのまま。

私が睨むようにまりっぺを見上げると、彼女はちらと舌のピアスを見せつけるように小さく笑った。

「う、うう……ねえ、まりっぺ、好きだよ……だから……」
私はまりっぺのこと、何も分かっていなかった。彼女はもう、私を縛って離さないつもりなのだ。この恋はもう、自分で終わらせることもできないのだと悟った時には、もう遅かった。

そんな不釣り合いな私たちを、ローズの甘くて煙たい香りが優しく包み込んでいる。まりっぺが与えてくれるこの味は、こうしてずっと私を縛り続けるのだろう。私の恋が寂しく終わろうとも、きっと、ずっと。

ここから「flowline flower」の感想をお聞かせください！



または、<https://forms.gle/d8zfmpGApGj9jZGXA>

表紙イラストと「土手の魚」を除く全ての作品は CC BY 4.0 でライセンスされており、ライセンスの条件に従っている限り自由に利用できます。CC BY 4.0 の詳細は以下の URL で確認できます。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

To the extent possible under law, 野沢菜 and 片桐天音 have waived all copyright and related or neighboring rights to cover image. This work is published from: 日本.

:comet: <https://abs.twimg.com/emoji/v2/svg/2604.svg> and
:cherry_blossom: <https://abs.twimg.com/emoji/v2/svg/1f338.svg>
emojis used in cover image are licensed under a CC BY 4.0 by Twitter, Inc and other contributors.

To the extent possible under law, 野沢菜 has waived all copyright and related or neighboring rights to 土手の魚. This work is published from: 日本.

書名 flowline flower
発行日 2019/05/06
発行 変態美少女ふいろそふい。
印刷 変態美少女ふいろそふい。出版部
連絡先 circlemaster@hentaigirls.net

変態美少女ふいろそふい。